

〔論文〕

保育所保育指針における 乳児保育の実践構造の検討

—乳児保育研究 その4—

大方 美香

Mika Oogata

大阪総合保育大学

本論文は、乳児保育の実践構造、すなわち乳児への働きかけの構造を解明することを目的とする。近年、乳児保育の重要性が指摘されているが、乳児保育の実践構造が解明されたとはいえない。そこで、大方（2012・2014）らは、1965年及び2008年保育所保育指針を使って実践構造のモデルを検討し、1965年保育所保育指針より①単純活動モデル、②望ましい活動重視モデル、2008年保育所保育指針より③ねらい重視モデル、④主体重視モデルの4つのタイプを抽出し乳児保育の構想を理論的に提案した。この提案は、乳児保育の具体的な事例を使って実践構造にどのように現れているのかを本論文では検証する。また、4つのタイプの分布を検証することにより、各々のねらいの位置づけや関係などを整理し4つのタイプをより具体的な提案とすることを目的とする。

乳児の実践には多くのタイプがあり、これを整理する観点をいくつか示した。ポイントは、ねらいと内容の統合的理解の仕方、及び、子どもの活動の理解の仕方に課題があることを指摘した。4つのタイプが乳児保育の実践構造の質的検討をするためには有効な分類であること、特に、乳児の生活における子どもと保育者の内の側面についての客観的な分析によって、乳児保育の実践構造の適切性を検討することが示された。

キーワード：乳児保育、指導計画、保育所保育指針

I 問題の所在と本論文の課題

1) 問題の所在

保育学への貢献は、乳児保育における実践を豊かにすることであるが、ねらいをどの文脈からひきだし妥当性を担保していくかは重要である。保育実践における「ねらい」もまた各保育者の判断に任されてきた傾向にある。すなわち、乳児保育の実践構造は、「何を育てる時期なのか」、「保育者はどのような働きかけが必要なのか」という課題意識に基づいて「どのような視点（ねらい）から乳児保育を行えばよいのか」を整理する必要がある。「保育の構造」という概念は、1980年に金田利子が教育心理学会における自主シンポジウムで「乳児保育における発達研究の理論と方法をめぐって—保育の構造と子どもの発達—」と企画している。金田はその趣旨として「乳児保育の全体構造を捉え、そのなかで、乳児の保育実践、とりわけ、発達と保育実践がより明確になりやすい乳児の保育実践を取り上げ、その実践の到達点についての共通理解を得ておきたい」と考えた。また、乳児期の研究は、最近きわめて盛んになっているが、分野別の研究が

多く、その相互の関連性や統合性を重視した研究がまだまだ少ない。乳児期の研究を「乳児保育」において活用してみようという方向は、まさに、この関連性、統合性を図る乳児研究の方法であると考えられる。先行研究としてCiniiでキーワード分類して調べた結果、編成論を念頭においた研究は少ない。保育・指導計画では16件（注1）であった。質問紙調査による先行研究では、三好年江（2012）「保育所における指導計画作成に関する実態調査（新見公立大学紀要 33, 169-175）」1件が検索された。三好（2012）の調査結果では、「指導計画の必要性については、保育士の50%がとても必要、42%がまあまあ必要、合わせると約9割の保育士が必要であると感じていることがわかった。一方、必要と思わない保育士も一割いることがわかった。また、指導計画における困り感や悩みは約6割の保育士が持っており、書き方に関することが最も多く、次いで保育の内容や理解である。（p169）」と述べ、「適切なねらい」を立てる必要性が記載されていた。また三好（2012）は「ねらいを立てる際はまず子どもの実態を捉え、子どもに育つことが期待される心情・意欲・態度は何かを読み取りねらいとして明確に打ち出

し、保育の方向性や内容を決めていく。～子どもの実態を捉えきれず方向違いのねらいを立てたならば、子どもの育ちを支えることはできない。(p173)」と書いている。本論文では年間及び月間指導計画作成のねらい編成に焦点をあて、保育者への質問紙調査から実践構造の実態にせまる。

この意味では、金田（1980）らが1980年代に教育心理学会などで展開した「乳児保育における発達研究の理論と方法をめぐって－保育の構造と子どもの発達－」を企画した問題意識は、保育の実践構造の全体性を志向したものと考えることができる。そこでは、やや結論的に、関係・環境・指導の3つをキーワードとして検討しており、乳児保育の実践構造を解明する手がかりを与えている。ただし、いろいろな知見を基にしてそれを統合するかたちで検討しようとするため、実践構造それ自体を検討する姿勢が不鮮明となり結論も抽象的なものとなっているが、やむをえないであろう。乳児保育における保育実践の構造という視点はいまだ確立していないが、金田はその趣旨として「乳児保育の全体構造を捉え、そのなかで、乳児の保育実践、とりわけ、発達と保育実践がより明確になりやすい乳児の保育実践を取り上げ、その実践の到達点についての共通理解を得ておきたいと考えた。また、乳児期の研究は、最近きわめて盛んになっているが、分野別の研究が多く、その相互の関連性や統合性を重視した研究がまだまだ少ない。乳児期の研究を『乳児保育』においてみようという方向は、まさに、この関連性、統合性を図る乳児研究の方法であると考えられる。」と提案している。このように、乳児の保育実践の構造は未整理のままであり、この解明に取り組む必要があるといえる。しかし、その解明のために実際の乳児保育の実証的な検討を行うなどいろいろなアプローチが考えられる。そこで、筆者たちはまず保育所保育指針に示されている乳児保育の実践構造を整理することとした。その具体的な課題として考えられるのは、以下のとおりである。

1) 保育所保育において、乳児保育の実践は、実践計画に基づくものであり、その実践計画は、保育課程及び指導計画に規定されていると想定できる。現在は、2008年改定の保育所保育指針（以下、08指針と省略）に規定されており、08指針はどのような実践構造を提起しているのかを読み取り、整理することを本稿の目的とする。この場合、実践構造とは、目の前の子どもに保育者はどのように働きかける構造を持つかを示す。その実践は、保育者の働きかけの計画（これを実践計画という）や保育者の働きかけの行為を含むものとする。具体的には、保育所保育指針が全ての実践を規定しているわけではないが、08

指針は、乳児保育の実践の枠組みを定義している。特に、省令として位置づけられたこともあり、枠組みとして正当に評価されなければならない。この検討の際、1965年の保育所保育指針（以下65指針と省略）は、08指針と比較するために取り上げる。65指針は、保育課程・指導計画の考え方が08指針とは異なると仮定しているためである（大方ら2008, 2003）。

- 2) 乳児保育の実践構造が、保育課程・指導計画作りに規定されていることから、「①子ども理解②目標・ねらい③保育の内容④保育者の役割⑤評価」という5つの視点から検討する。本来ならば、編成の手順を検討することで、実践と指導計画の関係がわかるはずであるが、編成の手順は保育課程・指導計画の考え方と連動すると考え、このような観点を設けた。保育課程と指導計画はどのようにつながっているのか（いないのか）、指導計画と保育実践はどのようにつながっているのか（いないのか）を検討する。
- 3) 2つの指針が想定している乳児保育の実践構造とはどのようなものを整理する。特に、乳児保育の実践が、乳児に適したものとして構想されているのか、その特徴は何かを検討する。
- 4) 保育課程・指導計画は保育実践をどのように規定しているか（規定していないか）を検討する。これまでの想定では、保育課程が保育実践の枠組みを規定するものであり、指導計画が実践計画であると考えていた。しかし、08指針は、指導計画と保育実践が直接つながりにくく、保育現場の自主的判断に委ねるといった積極的な面を持つ反面、乳児保育の実践構造をあいまいにしている面を持つことを論証する。なお、08指針、65指針には各々解説書がある。本稿では、2008年保育所保育指針解説書（厚労省2008）、1965年保育所保育指針解説書（山下1965）を使用し、08解説書、65解説書と表記する。

2) 乳児保育の実態の検討

幼児教育は、乳児保育が土台となって0歳からの子どもの発達が俯瞰できる。しかし、乳児保育は、乳児保育における指導計画編成を共有しあうところには至っていない実情である。その理由は様々であるが、乳児保育の理論的な立場が不明確といえる。そのため、保育現場は各々の努力で乳児保育を進めてきている実態がある。幼児教育も同じことがいえるが、特に、乳児保育は原理的に難しい議論を含んでいる。

本論文は、乳児保育の実態、特に、保育者の保育行為をふまえた乳児保育の実態を検討する。乳児保育は、長

時間、長期間保育の時代である。安心して預けられる乳児保育とはどうあるべきかを考える必要がある。乳児保育は、「行為が子どもの期待を起す。」ということ为前提として新たな展開を考えていきたい。行為（注2）とは、「人格は行為を通じてのみ実現されるから、行為は人間存在が自己を外化し、外化を通じて自己を内化する自己実現の活動を意味する。（出典 | ブリタニカ国際大百科事典）」すなわち、行為とは保育における活動を意味する。乳児保育では生活活動を軸とした新たな展開を考えていきたい。乳児の場合、家庭において、母親が行為の主たる役割を果たす可能性が高い。しかしながら、保育においては、その専門性の蓄積から行為の主たる役割を果たすのは保育者である。子育ての孤立を含め、子育て支援がいわゆる昨今においては、保育者の働きかけや行為への着眼がさらに求められる。

保育では、一般的に「愛情」とか「信頼関係」等といった言葉が使われる。しかしながら、乳児保育においては保育者の行為を通して「愛情」や「信頼関係」等が構築される。行為なくして自然発生的に生まれるものではない。では、どのような行為かということが課題である。乳児保育においては、子どもが心地よい（快）と感じる行為を通じてのみ行為への期待が生まれ、結果、期待する主体性が生まれる。信頼関係や愛情認知とは、保育者の行為によって構築される。すなわち、どのような生活活動が子どもの期待を生み出し、応答的な人との関係性を生み出す根源となるのか。乳児保育における実践構造とは、目の前の子どもに保育者はどのように働きかけるのか、その行為を構造化し俯瞰して示すことが求められる。すなわち、乳児保育における実践とは、保育者の働きかけの計画（実践計画）や保育者の働きかけの行為を指す。保育の実践はカリキュラムであり、乳児保育の全体構造は保育の計画（カリキュラム・マネジメント）といえるのではないか。乳児保育の実践構造を全体として構造的に捉えることは、保育者の役割や指導方法を明確にする。特に、乳児期は、人間としてヒトから人になっていく発達過程の時期であり、この発達と保育実践が行為、すなわち生活活動を通じてより明確になる。乳児期の研究は、近年きわめて盛んになってきているが、分野別の実験や研究にとどまっている。発達過程として「全体として育つ時期」である乳児保育への統合した視座は未整理といえる。本論文では、乳児保育における保育実践における実証的な検証を行いながら、乳児保育における保育内容の新たな展開を考えることを目的とする。

3) 乳児保育の言説を振り返る

乳児保育は、すでに様々な考えによって成り立ってき

た経緯がある。ここでは、まず乳児保育の言説について振り返る。

①家庭保育同一視論（母親代行主義）

この考え方は、母親の代行としての乳児保育においては、乳児保育が家庭保育の延長であり、乳児保育が必要悪とされた時代の理念である。子どもは保護者に育てられることが理想であるが、「保護者の都合上やむおえず社会的保育を利用する」という時代の保育観は、母親の代行として乳児保育が位置づけられることが多かった。母親の代行としての乳児保育においては、子どもとの情動の繋がりが強調されてきた。その理論的な方向性を今日なお提議しているのは、ポウルヴィなどの精神分析学派であろう。今日、積極的に保育のプログラムとして提議されているも情動主義（情動交流が中核）、前者では、基本的な生活習慣及び生活リズムが強調され、端的に言えば「子守的保育」というように捉えることもある。後者は、認知論の持つ一面性を克服していくために社会的情動性を強調する流れがある。ポウルヴィと情動の関係論はそうした傾向を示している。今日的に言えば「家庭的保育」の実現といえる。このタイプは、一方でケアする（母親が世話をするように世話をすること）ことに重点を置く場合と情動交流を積極的に位置づける場合とに分かれる。わが国では少ないが、保育の基礎としている乳児保育論は多いと考えられる。子どもへの関わりをしておけばいいという議論があるために、乳児保育の内容・指導計画の編成があいまいになってきた面がある。この極論は、乳児保育無用論や乳児保育必要悪論である。詳細はここでは議論しないが、誰も家庭保育を大きく越える保育内容がないというもので、その専門性は家庭の保育を見習えばよいという意見である。その根拠として母子関係論が援用されてきたことも多い。家庭保育同一視論と名づける。

②心理学主義（子どもの発達の姿を説明する）

心理学主義の場合は、子どもの成長の目安に軸がおかれている。例えば、発達と教育（保育）の関係を整理しないままになってきたことから、「発達の側面」からそのまま保育の目発達心理的に抑えていこうとする岡本夏生や汐見らの考えもある。これらの考え方は、従来の託児的保育から脱却し、子どもの発達の事実を押さえ、乳児保育の理論形成を行ってきた。この結果、貧困対策としての乳児保育や、預かれればよいという乳児保育、保護して安全に預かれればよいという管路的な乳児保育からの脱却が図られてきたといえる。08指針での「おおむね6か月未満」は、発達の特性として①～④の「著しい発

達]、⑤～⑥の「特定の大人との情緒的な絆の形成」の2つをあげている。08指針は、乳児保育の実践として「心身の発達や運動機能の発達」、「保育者として乳児の泣きや表情の変化に応答的に働きかける」という構造があるが、ゲゼルやピアジェの理論「生得的な反射に対する配慮」「誰にでも示す定位・信号行動」という特性はこの時期にあるとすれば乳児保育の実践はどう変わるのであるか。また、シエマの獲得など基本的な行動変化を読み取る視点もピアジェが提起している。さらに、ゲゼルが示しているような発達の諸側面を全体として押さえることや適応行動のような周りにどう定位するのかという視点もあるといえる。ポウルビヤヴィゴツキーの「情動の交流」は、ヒトとして育つ乳児保育の原点であり、集団保育では最も配慮すべき事項だともいえる。また、ピアジェの説は、「認知の発達」だけではなく、あらゆる乳児の活動に影響を与えるともいえる。以上のことから、乳児保育の実践は、個人差や08指針の発達区分以上に、保育者が乳児の何を育てるのかという働きかけを整理するという課題がある。そのためには、個別の働きかけ、つまり担当制としての働きや月ごとの個別指導計画が重要である。乳児の指導計画は、「子どもの主体的活動としての発達過程」と「発達過程に対する保育者の働きかけ」という構造の整理が短期と長期の両方において必要である。

③生活指導（基本的生活習慣の育ちを中心として）

待井和江、増田真由美、阿部和子らは、乳児保育の基本を生活的生活習慣の育ちを軸として遊びを導入している。しかし、生活指導、実際には限定された基本的生活習慣のしつけ的側面が強い。例えば、身体移動、関係能力（大人と対応する能力）などには向かっていない。ケアとしての乳児保育については山下敏郎がカリキュラムとして基本的生活習慣を軸とした指導を編成している。阿部和子は基本的生活習慣と遊びから編成している。

II 保育所保育指針が提起する乳児保育の実践構造

それでは保育所保育指針はどのような視点で記載されているのだろうか。

1. 保育所保育指針が提起する乳児保育の実践構造

65指針と08指針について比較検討した結果、主な結論として次の5点を提示した。

1) 乳児保育の実践構造には、違いが存在

65指針は、保育内容のベースに活動分化の視点から

「生活・遊び」→「健康・社会・遊び」→「健康・社会・言語・遊び」という構図を持っていたが、08指針は、0歳児を除いて、「養護」プラス「健康・言葉・環境・関係・表現」にした。したがって、乳児の独自の構造はなくなったことになる。

2) 65指針は「活動・経験」の視点から内容を方向づけ、08指針は保育の「ねらい」を提示する視点から「養護」プラス「健康・言葉・環境・関係・表現」に変化

健康という同じ用語でも、65指針は健康活動であり、08指針は健康の「ねらい」といえる。ただし「内容」は「ねらい」を細分化しているため、どちらも到達すべき子どもの姿といえる。また、08指針は年齢ごとのねらいと内容の表示をやめた。このことは、乳児保育の実践構造を考える上でねらいと内容が抽象化することにつながる可能性がある。

3) 乳児保育の実践構造として、65指針は、生活活動と遊び活動が実践構造の中核

活動は達成すべき目標として位置づけているために「望ましい経験と活動」と望ましいという保育のねらいを含んだものとなっている。このため、ねらいは活動内容を表示することになり、わかりやすいといえる。同時に、特定の活動に追い立てる可能性もある。08指針は、ねらいは「心情・意欲・態度」というかたちで構造化されたかたちで提示され、養護と教育（5領域）で示されている。乳児保育の実践構造は、その領域ごとのねらいの実現と考えれば、養護プラス5領域が実践構造ともいえる。一方、「総合的に考える」という立場からいえば、保育者がする事項と子ども発の活動への援助が実践構造であるともいえる。08指針では、2歳未満までの場合に、個別の指導プランを必要としており実践プランと指導計画の乖離が大きくなり、集団の計画もどのように編成するかは生活・遊びの流れに応じてと書いてあるに過ぎない。これも適切な判断が現場に期待されている。このため、乳児保育の実践構造といっても、保育士が行う事項以外は子どもの環境への関わりしだいということになる。乳児保育の実践構造はどうあるべきかは、ほとんど整理されていない。乳児保育の実践構造は1つの方向ではなく多様な方向を含むものであると示している。大方らは65指針と08指針について比較検討した結果、次の4つの乳児保育の実践構造が想定可能であることがわかり、4つのモデルを提示した（大方ら2012, 2014）。

すなわち、65指針からは2つの実践構造（後述の①単純活動モデル、②望ましい活動重視モデル）、08指針からは2つの実践構造（後述の③ねらい重視モデル、④主

体重視モデル)が想定された。その想定の際に、次の点を考慮した。1つは、65 指針は、保育内容の基本として、「活動分化」の視点から「生活・遊び」→「健康・社会・遊び」→「健康・社会・言語・遊び」という構図であった。一方、08 指針は、0 歳児を除いて、「養護」プラス「健康・言葉・環境・関係・表現」に変化した。したがって、乳児保育独自の構造はなくなったことになる。2つは、65 指針が「活動・経験」の視点から内容を方向付けようとしていたのに対して、08 指針は「保育のねらい」の視点から「養護」プラス「健康・言葉・環境・関係・表現」に変化したことがある。厳密に言えば、健康という同じ用語でも、65 指針は健康活動であり、08 指針は健康のねらいといえる。ただし、保育の内容における「ねらいと内容」の関係は、「内容」に子どもが経験すべき事項として「ねらい」を細分化して示されていることから、どちらも到達すべき子どもの育ちになっている。また、08 指針は年齢ごとの「ねらいと内容」を表示しなくなったことから、乳児の実践構造を考える上で「ねらいと内容」が抽象化する可能性がある。

2. 4つの実践構造モデルの理解と発展

このことをふまえて、4つのモデルを活動理解の側面から説明を行う。活動理解とは、活動は、単に外から見える子どもの行為だけではなく、外からは見えない子どもの行為がある。これは、内的活動、内的操作とよぶことにすると、4つのタイプはより鮮明に理解されると考えている。

1) 単純活動モデル (図1)

単純活動モデルは、保育内容の区分を提案している。保育内容の中心は活動であるので、保育内容の区分は活動を「領域」として分けることであり、表1のように区分している。このモデルのポイントは、「活動」の視点から領域を分け、また、「活動の分化」として領域の分化を想定していることである。領域区分から示されている内容である。このタイプは、さらに活動内容を再分化して示すことが可能であり、図1-1、1-2、1-3で示している。乳児の保育を実際実施するには、図1-1~図1-3が示すように遊びと生活の関係によって多様な実践活動が考えられる。また図1-1が示す「生活としての活動」のなかには「基本的生活習慣」が一部含まれる。

単純活動モデル(図1)は3つに分けられるが、特徴としては外的活動・経験の軸を基本としている。1歳児6月の月間指導計画事例(乳児保育より引用)では、「活動の展開」として「生活」「遊び」がある。生活の前期には、「スプーンを使って食べる」、遊びの前期には「室内で体育遊びをする」と書かれている。①単純活動モデルは「生活・遊び」の外的活動にのみ着目しているといえる。子どもの活動は、乳児の場合、特に重要である。人間として基礎的な生活活動がまず乳児期の保育内容である。子どもの生活活動全体が保育の活動であり、そのなかで、保育の目標・ねらいを実現していくことになることが基本である。したがって、生活活動全体が保育内容であると考えることが可能であり、保育内容とは子ども

表1 保育所保育指針における領域区分

区分	保育計画	6か月未満	1歳3か月未満	2歳まで	2歳	3歳	4歳以上
1965年	保育計画・指導計画	なし	生活遊び	生活遊び	健康・社会・遊び	健康・社会・言語・遊び	6領域
2008年	保育課程・指導計画	養護と教育(5領域) 年齢の記述なし					

2008年：養護(生命の保持と情緒の安定)、5領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)、1965年：6領域(健康・社会・言語・自然・音楽リズム・絵画製作)、1990年・1999年は養護が基礎的事項である他は2008と同じ

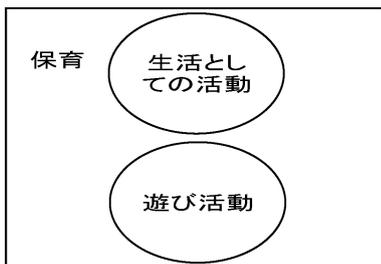


図1-1 単純活動モデル 65 指針

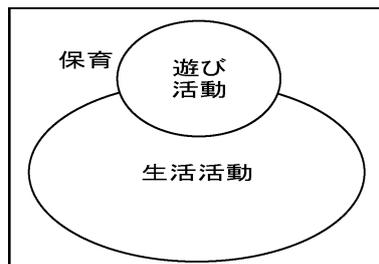


図1-2 単純活動モデル 65 指針

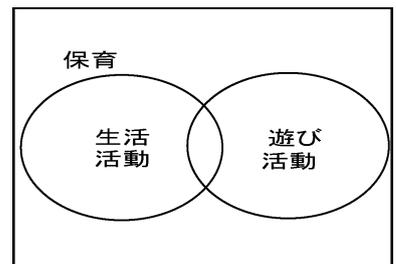


図1-3 単純活動モデル 65 指針

の活動そのものである。しかし、月間指導計画のねらいはあっても活動そのもののねらいがないことから、①のタイプは、生活活動であり、統合していないといえる。ただし、「スプーンを使って食べる」という生活には、子どもなりのやり方もある。スプーンという道具を使うことは手の操作が求められる。同じ時期に「感覚遊びをする」となっており、その遊び活動を通じて手の操作性が育ち、「スプーンを使って食べる」生活活動につながる部分は統合しているともいえる。また大人とのスプーンのやり取りという行為を習得するプロセスのなかで、子どもなりに動機づけという内面の活動があると考えられるならば、子どもは内的活動をしていると考えられることもできる。指導上の留意点では、「一人ひとりの食べる量を知り、適量を与えて残さず食べる喜びを知らせる」と書かれている。したがって、活動を起点とする場合には、活動における子どもの気持ち・子どもの行う内的操作を念頭におくことで単に「させる活動」という視点から脱却できるのではないかと考えられる。

2) 望ましい活動重視モデル (図2)

望ましい活動重視モデル(図2)は、65指針における実践構造のもう1つのタイプである。「保育計画は、在所する各年齢の乳幼児の望ましい活動を選択、配列し、また、全体として一貫性を持ったものとなるよう作成されなければならない。」とし、全体計画は活動を選択して一貫したものとなるようにと考えている。保育計画は、「各保育所においては各章に示されている事項に基づき、それぞれの保育所において適切な保育計画を作成する」とされ、保育の現場に任されている部分もある。しかし、「活動の選択・配列」は65指針で示した「望ましい経験と活動」を参照して作成することを想定していると考えられる。「望ましい活動・経験」そのものが「保育のねらい」になる側面を意識したもので、保育者の子どもに対する働きかけが意識されることになる。

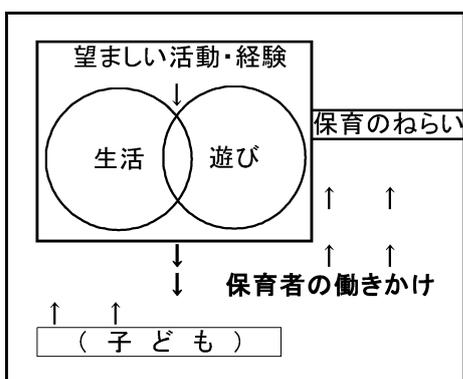


図2 望ましい活動重視モデル 65指針

活動は達成すべき目標として位置づけているため「望ましい経験と活動」と「望ましい」という保育のねらいを含んだものとなっている。ねらいは活動内容を表示することになり、実践構造としては、わかりやすいといえる。ただ、望ましい活動が明確なだけに保育者が一方的に子どもをねらいに合わせてやらせてしまう可能性も否定できず、特定の活動に追い立てる可能性もある。1965年保育所保育指針②望ましい活動重視モデル(図2)の考え方は、乳児保育の場合に、歩行をどのように捉えればいいのか、初語の発話に保育はどのように計画すればいいのかなど具体的な問題を考えてみると、①単純活動モデルが妥当であるともいえる。①単純活動モデルの1歳児年間指導計画事例(乳児保育より引用)には「第1期:園の生活に慣れ、嫌がらずに食べる。→第2期:よくこぼすが、スプーンに慣れて一人で食べる。→第3期:昼食が出るまで待ち、喜んで食べる。→第4期:保育者の手助けを嫌がり、一人で食べる」となっており、1歳児5月の月間指導計画では「基本的な生活(食事・排泄・午睡・着脱・清潔・鍛錬・安全)」「集団生活「遊び」となっている。さらに「経験や活動」として「一人で食べようとする」「こぼすがコップを持って飲む。」と書かれている。「指導上の留意点」には「自分で食べようとする気持ちを大切に、徐々にスプーンやコップに慣れさせていく。」と保育者主体で書かれている。学習活動として組織されることが一義的にあるのではなく、人間として基礎的な生活活動がまず乳児期の保育内容としてある。このように、生活活動全体があって、その上で保育のねらい・内容があることを考えれば、ねらいの立て方にもよるが、生活活動の全体が保育の活動であり、そのなかで、保育の目標・ねらいを実現していくことが基本である。保育者が何らかの目的を持って材料を選択・配列することが保育内容の実践構造ということになる。その場合、発達と活動の見地から目標・ねらいを特定化していくことが必要である。以上のことから、②望ましい活動重視モデルは、外的活動だけではなく育てるべきねらいを望ましい経験として示していると理解することが出来る。特に、乳児保育の実践構造では、大人の子どもへの働きかけという関係性や行為が重要な意味を持つ。

3) ねらい重視モデル (図3)

08指針における実践構造の1つは、「子どもの最善の利益」を第1義的なものとし、「発達過程」(第2章)をふまえ、「保育のねらい及び内容など」(第3章)が「保育所生活の全体を通して総合的に展開される」ように編成されるとしている。また、保育課程に基づいて「具体的な指導計画」を作成し、「環境を通して保育することを

基本」とすると述べている。子どもにとって何が最善の利益かと考えるのは、保育所・保育者であり、保育者としての観点を明確にする必要がある。ねらいは心情・意欲・態度というかたちで構造化されたかたちで提示されていることから、養護と教育（5領域）で示されているものの、実践構造としてはその領域ごとのねらいの実現と考えれば、養護プラス5領域が実践構造となる。5領域を軸としたことから、乳児においても同じ実践構造になっている。

4) 主体重視モデル (図4)

図4に示されるように、08指針における実践構造のうち1つは、環境を通して「子どもの主体的活動」による子どもの育ちを大事にすることである。「子どもの主体性の尊重と計画性のある保育」を目指し、そのバランスをとることが示唆されている。「最善の利益」といっても漠然とした方向をえないものであるが、「子どもの主体性の尊重」という言葉には、子どもの主体的活動が中心となることが予想されている。保育所・保育者の指導計画の編成によるという面も持っている。このため、保育の計画（保育課程と指導計画）は、「安定した生活を送り、充実した活動ができるように編成し、一貫性のあるものとする」と述べている。5領域の視点だけではなく、総合的に考えるという立場からも考えられる。「生命の保持と情緒の安定」という「養護」は65指針の生活ではなく目標として位置づけ、「5領域」は65指針の活動としての「遊び」ではなくやはり目標になっていることに留意したい。「保育者がする事項」としての「保育士等がしなければならない事項」と「子ども発の活動への援助」としての「子ども自身が身につけることが望まれる事項」であり、これも実践構造であるといえる。08指針は、2歳未満までの場合に、個別の指導プランを必要としていることから、実践プランと指導計画の乖離は大きくなる。個別指導計画とクラスとしての集団の指導計画をどのように編成するかは、実践では生活・遊びの

流れに応じてと書いてあるに過ぎないのでさらに複雑である。しかし、これも適切な判断をすることが現場に期待されている。このために、実践構造を描くといっても、保育士等が行う事項以外は子どもの環境への関わりしだいということになる。

以上、保育の考え方として、まず65指針では望ましい経験と活動を明示し、しかも、指導計画の中核に活動の選択・配列をおいているが、08指針では心情・意欲・態度という発達の視点を軸にしており、具体的なねらいは子どもの主体的な活動に関わって編成される可能性をはらんでいる。このような指導計画の考え方の違いがある。乳児保育の実践構造は、65指針では方向づけられるのに対して、08指針はある程度保育者の推察・判断に委ねざるを得ないことになり、極端な場合には後から指導計画を作るということも発生しかねない可能性を持っている。65指針は活動の分化論を前提とし、08指針は目標・ねらいの一貫性に視点をあてているという違いがある。次は、養護を中心として保育者が行うことについて、08指針は明確に明示しているが、1965年保育所保育指針は他の活動と並列され保育者のすることが必ずしも明示されていない。さらに、ねらいの立て方を比較すると、65指針は、「望ましい活動・経験」の視点から選択・配列し、内容を方向づけようとの考え方であり、実践プランに直接つながる。一方、08指針のねらいは、心情・意欲・態度というかたちで構造化されたかたちで提示され、「養護と教育（5領域）」で示されている。実践構造は領域ごとのねらいの実現と考えれば、養護と教育が乳児保育の実践構造となる。もう1つの可能性は、領域ではなく、「総合的な」活動のねらいから作成する。しかしながら、「保育者の創意工夫」となっており、「ねらい」は保育者に委ねられている。以上のことから、指導計画作成の視点として「望ましい活動」というかたちで整理した65指針における「保育所保育指針の考えに基づく実践プラン」と08指針における「子どもが環境と関わっての主体的活動を軸にしたプラン」の2つの実践構

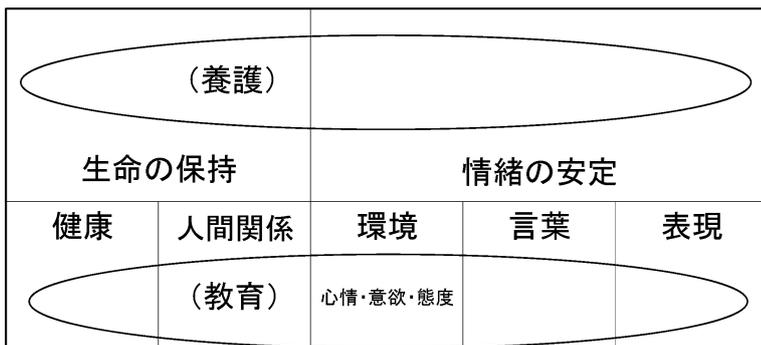


図3 ねらい重視モデル 08指針

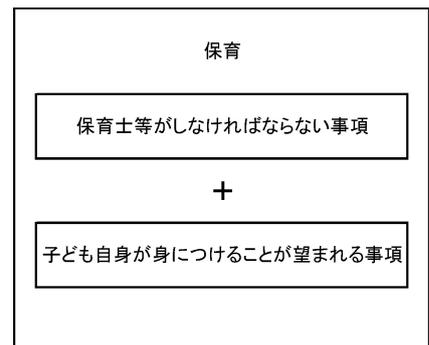


図4 子ども主体モデル 08指針

造を取り出すことも可能である。

Ⅲ 保育課程と指導計画の考え方の検討

1. 保育課程（保育計画）の考え方

08 指針の「保育の計画」は、保育課程（保育計画）と指導計画によって構成され、65 指針の「保育計画」は、全体計画と指導計画を作成するものとしている。基本的に2つの指針は、各々の編成の考え方や編成の手順について述べている点では同様である。まず、保育課程（保育計画）について考えてみる。

（1）65 指針における保育計画の考え方

65 指針では、「保育計画は、在所する各年齢の乳幼児の望ましい活動を選択、配列し、また、全体として一貫性を持ったものとなるよう作成されなければならない。」とし、全体計画は活動を選択して一貫したものとなるよう考えている。保育計画は、「各保育所においては各章に示されている事項に基づき、保育所において適切な保育計画を作成する」とされ、保育の現場に任されている部分もある。しかし、「活動の選択・配列」は、65 指針で示した「望ましい経験と活動」を参照して作成することと考えられる。その上で、保育計画は、保育の原理、保育内容構成の基本方針の諸事項を基とするとあり、基本方針の諸事項では、次の3つのことを述べている。1つは、保育内容の区分を提案している。保育内容の中心に活動を位置づけ、活動を「領域」として分けて保育内容を区分した結果、のように区分している。この提案のポイントは、「活動」の視点から領域を分け、また、「活動の分化」として領域の分化を想定していること、さらに、4歳になって初めて6領域となる点にある。2つは、7つの年齢区分を提示し、その区分ごとに「発達上の主な特徴」「保育のねらい」「望ましい主な活動」「指導上の留意事項」をあげている。3つは、先に述べたように「保育計画を作成する」ことにある。さらに、保育計画の指導にあたっては、指導効果があるようにするため、次の13の留意事項を示している。1) 発達段階、2) 個人差、3) 生活の流れ、4) 自発性、5) 総合性、6) 集団活動、7) 長時間保育、8) 入所時の指導、9) 組の編成、10) 家庭との関係、11) 問題行動のある子ども、12) 行事、13) 保育の反省と評価、であり、留意して保育計画を作るものとしている。以上のことから、65 指針は、ねらい、内容の典型が示され、実践の構造をかたち作るものと評価してよいと思われる。

（2）08 指針における保育課程の考え方

08 指針では、第1章総則で示された保育の目標を達成するために、保育の基本となる「保育課程」を編成すると共に、これを具体化した「指導計画」を作成しなければならないとして、子どもの育ちに関する長期的見通しが基本となるように考えている。保育課程は、「子どもの最善の利益」を第一義的なものとし、「発達過程」（第2章）をふまえ、「保育のねらい及び内容など」（第3章）が「保育所生活の全体を通して総合的に展開される」ように編成されるとしている。さらに、保育課程に基づいて「具体的な指導計画」を作成し、「環境を通して保育することを基本とする」と述べている。子どもにとって何が最善の利益かと考えるのは、保育所・保育者であり、保育者としての観点を明確にする必要がある。他方、環境を通しての保育では、「子どもの主体的活動」による子どもの育ちを大事にする必要がある。以上のことから、08 指針は、「子どもの主体性の尊重と計画性のある保育」を目指し、そのバランスをとることが示唆されている。しかし、「最善の利益」といっても漠然とした方向づけを超えないものであり、「子どもの主体性の尊重」という言葉には、子どもの主体的活動が中心となることが予想されているが、保育所・保育者の指導計画の編成いかんによるという面も持っている。このため、「保育の計画」（保育課程と指導計画）は、「安定した生活を送り、充実した活動ができるように編成し、一貫性のあるものとする」と述べているが、その中核となる「安定した生活」「充実した活動」が何を意味しているのかは明らかではない。また、保育課程の内容編成については、「各保育所の保育の方針や目標に『基づき』、第2章（子どもの発達）に示された子どもの発達過程を『ふまえ』、前章（保育の内容）に示されたねらい及び内容が保育所生活の全体を通して総合的に展開されるよう編成しなければならない」と述べている（08 解説書, p.126）。しかし、総合的とは何かという方向づけはされていない。さらに、「生命の保持と情緒の安定」という「養護」は、65 指針の生活においては示されていないが、08 指針では目標として位置づけている。同時に、「5領域」は65 指針の活動としての「遊び」として示すのではなく、08 指針では目標として位置づけていることに留意したい。解説では参考例としているが、「1）保育の基本についての共通理解、2）子どもの実態の把握、3）保育所の保育理念、保育目標などについて共通理解、4）子どもの発達過程を見通し、それぞれの時期にふさわしい具体的なねらいと内容が一貫性を持って編成されるとともに、子どもの発達過程に応じて保育目標がどのように達成されていくかの見通しを持って編成する。5）保育時間の長

短、在所期間の長短など考慮する、6) 保育課程に基づく経過・結果を評価する」の6つを掲げている。3)をはじめとして、各項目は多義的であることはやむをえない。この項目をふまえているいろいろな計画と実践があり、保育課程が実践とつながるものであるかは現場しだいということになる。保育課程における保育のねらいと内容について、08 指針は大きな変更を加えた。

1つは、保育内容に養護という領域を提案しさらに養護と教育の一体化としたことである。65 指針では保育全体で行うべきものとされた養護の視点を領域として取り上げたことである。それは、1990 年及び 2000 年の保育所保育指針ですでに基礎事項として取り上げられていたもの(表1参照)である。一度他の領域から切り離してその上で教育と一体であるという意味は賛否の分かれる提案である。2つに、保育課程の構成の中心である「保育のねらいと内容」の年齢ごとの記述をやめ、そのねらいを「心情・意欲・態度」という「発達の視点」から記述したことである。そのことによって、保育実践への示唆となり保育の骨格をあいまいにし、現場の創意工夫という意味を強めている。保育課程は、具体的には、養護と教育(5領域)のねらいと内容を「子どもの実態から」作成すると示されていることから、子どもの実態をどう理解するのかはむしろ保育課程そのものが左右することになる。さらに、「総合的に展開される」という点に注目すれば、保育課程も総合的に編成する必要があり、保育課程の骨格がわからなくなる可能性も含んでいるといえる。この点で、08 指針では、「子どもの育ちに関する長期的見通し」を持つ保育課程を編成すると述べているが、長期的見通しをどのように保育所が理解するのも保育現場に任せる構造であるとなれば、この点からも、保育課程の骨格がわからなくなる可能性も含んでいるといえる。一方、領域の視点で保育課程の編成をする場合は、保育の内容が 65 指針のような年齢区分をなくしたために、保育課程は、領域主義になる可能性がある。以上のことから、08 指針が示唆している保育課程は、指導計画・実践の方向づけをしていない側面が多いと評価できる。08 指針は、「総合的に考える」「適切に考える」「〇〇を考慮して」などの用語が頻繁に使われ、保育現場に委ねる論理を持つという構造があるといえよう。つまり、ねらいについても内容についても示唆はあるが、保育実践の構造は「保育者の創意工夫」であるとされ、08 指針の保育課程の考え方は、保育現場で判断すべき側面が大きくなっていると考えられる。

(3) 2つの指針の保育課程の比較

65 指針では基本的には保育者が「望ましい経験と活

動」を中心としているのでわかりやすく理解しやすい。この場合、「望ましい経験」と考える事項が子どもの「活動」として示されるならば、その内容は実践にそのままつながると考えられる。一方、08 指針では、「子どもにとっての最善の利益」は、「保育士等が行わなければならない事項」を軸として考えられ、「子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくこと」、「子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくこと」は、子どもが環境と関わっての主体的活動を「子どもが身につけることが望まれる事項」を軸として考えられる。この場合、保育の内容は、実践として直接内容にはつながりにくい。どちらも、保育者が方向づける面と子どもを目の前にして保育所・保育者が判断すべき面との両方がある。

(4) 保育実践の方向づけについて

どちらの保育課程・全体計画も総合的に編成されるように書かれている。65 指針は、「子どもの活動は、総合的に行なわれているから、その活動を1つの領域だけに限って取り扱うことは適切でない。」とし、08 指針は、「ねらい及び内容が保育所生活の全体を通して、総合的に展開されるよう、編成されなければならない。」と書かれている。

2. 指導計画の考え方

保育課程・保育計画は大綱的なものを決めているとはいえ、実践の土台となるのは指導計画である。指導計画がそのまま保育実践の土台となれば、指導計画が実践の土台となるがそう考えてもよいのであろうか。

(1) 65 指針における指導計画の考え方

65 指針で考えてみると、基本は、「保育所では、保育の目標を達成するために、全ての子どもが在所中、常に適切な養護と教育を受け、また、それぞれの能力に応じて積極的に活動することができるように次の諸事項に留意して、調和のとれた発展的組織的指導計画を作成するものとする。」としている(65 解説書, p.244)。諸事項とは次の7点である。①保育のねらいの設定、②望ましい活動の設定、③望ましい活動の配列、④年間指導計画、⑤期間・月間指導計画、⑥週案・日案、⑦その他(個人差への対応、指導計画、子どもの実態理解)

①ねらいの考え方

保育の目標に「子どもは豊かに伸びていく可能性を秘めている。その子どもたちの現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎をつちかうこと」(65 解説書, p.210)とある。したがって、望ましい未来をつく

り出す力の基礎とは何かの理解が、保育所・保育者には問われる。一方 65 指針では、各年齢別に保育のねらいとして示している。さらに具体化するために、心身の発達程度、地域の実態などを考慮し、「保育のねらいをまた明確に設定すること」としている（65 解説書、p.244）。

②望ましい活動の考え方

望ましい活動の選択であるが、ここでも各年齢別に示された子どもの望ましい主な活動を基にして、子どもの年齢・保育年数などの違いなどを考慮して「生活経験に即した適切なものを調和的に選ぶ」としている。

③望ましい活動の配列の考え方

望ましい活動の配列であるが、「子どもの具体的な生活経験に即して、領域にとらわれないで総合的な生活のなかで指導できるようにすること」としている。その際、活動が偏りなく指導できるようにすることとある。

④年間指導計画、⑤期間・月間指導計画、⑥週案・日案、⑦その他（個人差への対応、指導計画、子どもの実態理解）の考え方

具体的な指導計画として、年間指導計画では、先の保育計画の具体化を図るとある。前述した保育計画もここでの手続きと同じ手順をふむことになり、年間の計画と相当重なる部分はあるが、具体化することはそう困難なことではない。次に、期間・月間指導計画でも基本的に同じであるが反省を反映させること、活動に偏りのないようにすることをあげている。また、週案・日案では、これまでの保育計画・指導計画をふまえ、その時期の子どもの実態に即し、最も具体的な活動を取り入れて、子どもの生き生きとした活動が展開できるようにするとある。以上の指導計画の編成は具体的に整理されているので、容易に実践の構造となる可能性がある。年齢ごとのねらいと望ましい主な活動が示されおり、保育内容を客観的に振り返ることも可能である。

（2）08 指針における指導計画の考え方

①指導計画の考え方

08 指針の指導計画の考え方の基本は、「保育課程に基づいて、保育目標や保育方針を具体化する実践計画」と位置づけている。では、どのように具体化するかが 65 指針のような項目は示されていない。08 指針はこの点で理解が難しいのであるが、次の点が考えられる。指導計画は、「保育実践の具体的な方向を示すもの」である。しかし、総則で「福祉を積極的に増進することにもっともふさわしい生活の場」、また、「乳幼児期にふさわしい体験」（総則、保育の方法）とあるが、乳幼児期にふさわしい生活を読み取ることはできない。保育所・保育士が考える乳幼児期にふさわしい生活ということになるが、

子どもが作り出す活動を超えて「乳児期にふさわしい生活」があるのかどうか明確ではない。指導計画である以上、保育のねらいや内容を組織・編成することになるが、どのようにして編成するのであろうか。

②ねらいの考え方

08 指針はどうねらいを考えるのが理解困難である。すなわち、「5 領域」ごとに目標を提示し、「子どもが身につけることが望まれる心情・意欲・態度」が書かれているので、これがねらいかと思うと、そうではなくて、「発達を捉える視点」として次のように 08 年解説書では「教育に関わる領域は、保育士等が、子どもの発達を捉える視点として 5 つに区分されています。」（08 解説書、p.65）と書かれている。というのは、領域ごとに示したこれらが「ねらい」ということになると、領域の活動が実践の中心となってしまう可能性があり、いわゆる領域主義に陥る可能性がある。よって、「この 5 領域が意味するものを理解し、子どもの発達を 5 つの窓からの確に捉えることが求められます。」（08 解説書、p.65）と示され、「領域」は「子どもの発達を捉える窓」だと考えていることになる。しかし、この教育における「ねらい」は、「子どもが身につけることが望まれる心情・意欲・態度などの事項をしめしたもの」とされていることから考えると、保育の到達目標として理解することが必要ともいえる。

③内容の考え方

08 指針では内容をどのように捉えているのであろうか。08 指針によれば、「内容」は 2 つある。1 つは、「子どもの生活やその状況に応じて保育士等が適切に行う事項」であり、もう 1 つは、「保育士等が援助して子どもが環境に関わって経験する事項」とされている。前者は養護に関わる内容であり、例えば、「一人一人の子どもの平常の健康状態や発育及び発達状態を的確に把握し、異常を感じる場合は、速やかに適切に対応する」（養護 生命の保持（イ）内容①）と示され、保育士が適切に行う事項となる。他方、後者は主に教育に関わる内容だとされ、「経験する事項」を領域ごとに示している。例えば、健康の内容として「いろいろな遊びのなかで十分に身体を動かす」（教育 領域「健康」（イ）内容②）というように、経験が保育内容として理解される。保育の実践構造としては領域活動を中心にする受けとめることは可能である。しかし、08 指針では、後者の編成は環境の編成であると次のように記載されている。「具体的なねらいが達成されるよう、子どもの生活する姿や発想を大切に適切な環境を構成し、子どもが主体的に活動できるようにする」（第 4 章 1、（2）エ）。後者の内容は、子ども自身が主体的に活動することだと捉えて受けとめることも可能である。解説書では、環境構成には特別に注意

を促し、「環境構成にはこうした計画的な側面と子どもが環境に関わりながら生じた偶発的なできごとを生かす側面」の2つのタイプがある。「子どもの生活や遊びを通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開されるものでなければならない」ことが活動として理解される。65指針と同じ活動が内容であるといってもよいが、その位置づけを読み取ることは困難である。内容として必要なのかという疑問がでてきても仕方がないといえる。後述するように、保育課程・指導計画の編成では、領域を使って示すのか、それとも「総合的」ということで示すのかに結びついている。いずれにしても、難解な解釈と決断が保育現場に求められている構造といえる。年齢別表示をやめたことは、構造を複雑にしているといわざるを得ない。

(3) 2つの指針の指導計画の比較

2つの指針は、活動の発展を中核にした指導計画であることは共通であり、次の3点の違いが認められる。1つは、保育の考え方として、65指針では望ましい経験と活動を明示し、指導計画の中核に活動の選択・配列をおいている。08指針では心情・意欲・態度という発達の視点を軸にしており、具体的なねらいは子どもの主体的な活動に関わって編成される可能性をはらんでいる。この違いがあるため実践のプランの方向が65指針、08指針ではある程度保育者の推察・判断に委ねざるを得ない。極端な場合には、実践の後に指導計画を作るということも発生しかねない可能性を持っている。ともあれ、65指針は活動の分化論を前提とし、08指針は目標・ねらいの一貫性に視点をあてているという違いがあるといえよう。2つに、養護を中心として保育者が行うことについて08指針は明確に明示しているが、65指針は保育者のすることが明示されているとはいえない。3つに、ねらいの立て方を比較すると、65指針は、「望ましい活動・経験」の視点から選択・配列し、内容を方向づけようとの考え方であり、実践プランに直接つながる。一方、08指針のねらいは、心情・意欲・態度を中核として構造化されたかたちで提示され、養護と教育（5領域）で示されている。実践構造としては領域ごとのねらいの実現が実践のプランとなるかもしれない。もう1つの可能性は、領域ではなく、実践は「総合的に」と書かれており、総合的な活動のねらいは領域から作成するとしても、それは「保育者の創意工夫」となっており、「ねらい」は保育者に委ねられている。以上のことから、指導計画作成の視点として「望ましい活動」というかたちで整理した65指針における「保育所保育指針の考えに基づく実践プラン」と08指針における「子どもが環境と関わっての主体的活動を

軸にしたプラン」の2つの実践プランの構造を取り出すことも可能であろう。08指針の実践は、保育者の指導事項の面として「子どもにとっての最善の利益」という方向性を示す言葉と、一方で「子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくこと」、「子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくこと」という子どもを目の前にして保育所・保育者が判断すべき面という2つがある。保育課程の項で触れたとおりである。この結果、「保育者が子どもに向かって何をなすべきか」を考える時、実践計画として直接内容とつながらないことから、保育の内容はわかりにくいものとなっている。

(4) 保育実践への方向づけ

実践の課題としては、保育課程・全体計画は、65指針において、活動の配列論が基本である。そこに示されている活動を選択・配列することが指導計画において原理とし、保育課程・指導計画の双方において望ましい活動の選択・配列との考え方を採択している。実践計画に直接つながる。一方、08指針は、「総合的に」「養護と教育が一体となって展開する」「子どもの実態に応じて」など用語は様々であり、「ねらい」「内容」については示唆されおらず保育者の創意工夫となっている。

IV 乳児の保育実践構造の土台を作る保育課程と指導計画の考え方の検討

乳児の実践構造を考える時に、ねらいと内容がその中核をなすが、その際に、1) ねらいは年齢別に変える必要があるのか、2) そのねらいは領域別に出すのか、3) もし領域があるとすれば、その領域はどのようなものか、などを検討する必要がある。これらが変われば、あるいは、保育者の認識が変われば、実践構造は大きく変わることになる。これらの点で2008年保育所保育は大きな変更を加えている。このため、乳児保育の実践構造には大きな影響があり、具体的にどのような実践構造が想定されているのかを検討する。

1. 乳児保育における保育課程（保育計画）の考え方

乳児保育における保育課程（保育計画）の基本的な考え方は、前章「Ⅲ保育課程と指導計画の考え方の検討」で述べた一般論と同じである。

(1) 乳児保育における保育計画の考え方 - 65指針と08指針の比較 -

乳児保育における指導計画は、「望ましい経験と活動」を中核とすることは乳児の場合も同じである。保育計画では年齢区分が必要であるとし、「1歳3か月未満」「1

歳3か月から2歳未満」と分けている。また、「内容区分」は「1歳3か月未満」「1歳3か月から2歳未満」の「活動としての生活」と、「活動としての遊び」が示唆されている。加齢とともに、活動が分化してくるから、「2歳」では対人関係と結びつくもの「社会」の領域とし、「健康・遊び・社会」としている（第1章2（1））。乳児保育における保育計画は、この年齢区分と内容区分に従って、両者のバランスをどうとるかということが大切である。指針には、指導計画作りの方向づけは示唆されているが、保育実践を規定しているとはいえない。

（2）乳児保育における保育の考え方－65指針と08指針の比較－

「保育課程及び指導計画」という全体計画は必要であり、保育課程は「子どもの主体的活動と長期の育ちのバランス」をとることは乳児保育も同様である。保育課程の編成は、「子どもの主体的活動」を重視する場合には、保育者の働きかけが重要な役割を担うという面から考えると、かえって子どもの成長を阻害する可能性もある。保育課程の編成におけるその他、留意することは次の点である。まず、保育課程を「望ましい経験と活動」を中心とする65指針と「心情・意欲・態度」を中心とする08指針では、一般論で述べた問題が同様にある。すなわち、明確な方向性を示しているのは前者であり、後程を構成するということは、乳児の場合に両方の方向が大事であるともいえるがその整理の原理をどう考えるかが大きな課題であろう。加えて、年齢区分と内容区分の扱いが変わった。65指針は、保育内容の区分、年齢の区分をしているが、08年指針はどちらもしていない。一方、65指針は保育計画を、08指針から考えると、バランスの理解によってはかえって子どもの成長を阻害する可能性もあることを留意し、どのような実践なのかの質が問われると思われる。保育課程の編成でそのほか、留意することは次の点である。1つは、「保育のねらい」では、年齢区分がなくなり、「年齢を超えたねらい」というかたちで提示され、生活と遊びという活動の区分すらもなくなった。乳児の保育では読み取りが難しいことになる。このため、「08解説書」では、「特に3歳未満児は、この時期の発達の特徴から見て各領域を明確に区分することが難しいことや、個人差が大きいこと」を認めた上で、「工夫してねらいや内容を組織することが求められます」とわざわざ書き加えている（08解説書、p.129）。2つは、ねらいは、「心情・意欲・態度」という「発達を捉える視点」からまとめられている。何を実践のねらいとするのが不明瞭である。乳児の多様で複合した発達の読み取りは力量を必要としていると考えられ、新たな整理をす

る必要と課題がある。

（3）乳児保育における2つの指針の保育課程（保育計画）の比較

08指針は保育課程を作成するという全体計画への示唆は同じである。65指針は内容区分及び年齢区分を方向づけているので指導計画や実践にそのままつながるといえる。08指針では内容区分及び年齢区分の扱い方を変更したために、08指針は保幼小の一貫性を保持するにはいいといえるが、1）保育所は乳児保育も集団保育であり、年齢別クラス運営・実践の構造を考える時に、「保育の計画」はどのように編成するのかという課題、2）乳児保育は、ヒトとして生きる発達過程上の最初の時期であることから、しっかりと子どもの育ちの見通しを持つ必要があり、年齢を超えた保育内容の表示には乳児保育の実践構造の点から整理すべき課題がある。なお、基本的に、実践への方向づけについては前述した保育課程一般と同様であるので省略する。乳児の保育課程は、指導計画作成とも連動しているため、この点を検討する。

2. 乳児保育における指導計画の考え方

乳児保育における指導計画の基本的な考え方は、前項で述べたことと同じであることをふまえて、ここでは、乳児保育における指導計画を具体的に考えてみたい。65指針は、年齢ごとに発達上の特性の理解→発達上の主な特徴→保育のねらい→望ましい主な活動・配列の順に示されているので、この順序で検討したい。08指針の発達上の特性の理解は紙数の関係上「3 発達過程と乳児の指導計画」で別に論じる。指導計画を整理したものが表2である。08指針は子どもの主体性を大事にしようとしているが、保育実践を指導計画にすることは難しいことがわかった。08指針と65指針を比較すると、保育の理念の一部だけが同じであるが、重なる部分は少ない。また、同じ専門用語が異なる意味で使われていることに編成の困難さを感じた。特に、保育計画と指導計画は、区別されているが、保育課程（保育計画）のねらいが実は年間指導計画の目標として書かれていることもあり、同じ言葉が違う意味になっていることがある。その意味では、保育課程（保育計画）、長期指導計画・短期指導計画の全体を俯瞰しないと保育がわからないということになる。4つのタイプの指導計画比較は、表2を見て考える。この表は、保育課程（保育計画、保育の理念を含む）において、目標として掲げている子ども像が異なることがわかる。保育課程編成によって、子どもの育ち・発達をふまえて指導計画を作成する。一方で子どもの育ち・発達を押さえる枠組みは異なり、当然内容も異なっている。年

表2 2つのタイプの保育課程、指導計画の比較

	保育の理念	保育課程	長期指導計画	短期指導計画(週案)	実践(プラン)
65 指針	①現在と未来を生きぬく力の基礎を培う(原理)。 ↓ ①子ども像。 ↓ ②保育の目標(情緒の安定・基本的な生活習慣・活動を通じた社会的態度・言葉・表現・豊かな情操7つ)。 ↓ ⑤保育の環境。	①左の保育の理念及び保育所の現状をふまえた子ども像を決める。 ↓ ②指針にある保育の目標の選択。 ↓ ③指針の「保育の主なねらい」の選択。	①子ども理解。 ↓ ②保育課程に示された目標及び主なねらいをクラスとして選択。 ↓ ③期ごとのねらい。 ↓ ④内容を「主な望ましい活動」から選択・配列する。	①子どもと保育の理解。 ↓ ②長期指導計画に示された目標・ねらいを参照する。 ↓ ③望ましい活動を選択して短期のねらいを作る。 ↓ ④総合的な活動を念頭に保育の内容と形態を考える。	1. 単純活動モデル 2. 望ましい活動重視モデル
08 指針	①現在と未来を生きぬく力の基礎を培う。 ↓ ②養護・健康・人間関係・環境・言葉・表現の6つの目標(子どもの主体性重視)。 ↓ ⑤留意事項(子ども理解・安定した生活発達理解・関係作り・自発性を促す環境・保護者との連携)。 ↓ ⑤保育の環境の構成・保育の環境(4つ)。	①保育の理念及び子ども理解に基づいて保育園としての領域の目標(養護2つと教育5つ)を決定。 ↓ ③目標に示されたねらいを年齢ごとに示す。 ↓ ④領域ごとのねらいを作成する(子どもの心情・意欲・態度で示す)。	①保育課程に基づき、子ども理解をふまえる。 ↓ ②目標は心情・意欲・態度を領域ごとに示す。その際に、養護(2つ)と教育(5つ)に示される2つの事項から③ねらいと④内容を保育者が判断して作成。 ↓ ⑤環境の設定の計画。	①養護では、保育者のすること及び、教育では子どもが環境に関わっての自己活動を原点に指導・援助計画を作る。 ↓ ③ねらいと④内容を保育者が判断して作成。 ↓ ⑤環境の再構成。指導計画の見直し。	2つの実践構造 3. ねらい重視モデル 4. 主体重視モデル
融合の保育	子ども中心 系統的な発達	子どもの内面(心情・意欲・態度) 子どもの活動	領域ごとの計画 クラス別の到達目標	A 週の環境に関わって、子ども主体に合わせる B 長期に合わせた子どもの活動	左のAとBを融合する

(×の部分は、具体化への段階を示す。)

間指導計画になると、期ごとのねらいと主な望ましい活動を示している 65 指針と育ちの領域からねらいを示している 08 指針との違いは大きいことがわかる。

また、大方らは保育所保育指針を検討して乳児保育の実践構造を整理し、以下のとおり提案する。

(1) 領域主義と生活主義の統合

乳児保育における実践構造は、多様であることを想定すると、実践構造（年間指導計画、月間指導計画、週案など）は、「領域」をどのように考えるのかということと、ねらいと内容という「保育の総合性」をどのように考えるのかということへの統合が課題となる。何らかの「領域」を設定することは当然であるが、子どもは人間として一体であり、部分的に順番に育つのではない。様々な身体性や精神性が一体となって総合的に育っていく。特に、乳児保育は生活が軸となって実践が行われる。子どもは様々な生活に適応しながら生きていることから（ここでは生活適応力とよぶ）、乳児保育における保育実践は、「領域」と「生活」の統合が必要であると考えられる。

乳児保育における生活とは「社会への適応」であると考えられる。人間は生理的に未成熟な状態で生まれ、生まれてからの周りの環境を通して育つ。すなわち、子どもはあらゆる環境、生活文化に適応していくこと、すなわち生活適応力こそが乳児保育において重要である。1965 年保育所保育指針は「望ましい活動」を「生活と遊び」に分けているが、「生活適応力」の視点から考えると当然といえる。65 指針は、「食事・睡眠・排泄・清潔・衣服の着脱」といわれる 5 項目、すなわち「基本的生活習慣」という特定の活動に特化して示していた。このことは重要なことであるが、子どもは周りの環境という生活に適応しながら、身体的、社会的、認知的、表現的な要因が影響しあって成長を遂げていく。

例えば、乳児が「コップを持つ」ことを考える時、身体的には「持つ・つかむ・持ち上げる・運ぶ」といった要因が考えられる。一方、「自分で持った」、「楽しんだ」といった表現的な要因もある。また、「コップ」という物的環境や生活文化への適応活動ともいえ、「コップ」という物への認知的要因もあるといえる。また大人が「コップだよ」「はいどうぞ」といったよびかけや関わりといった社会的要因も含まれる。「生活適応活動」とは、総合的であり、特定の力や部分を育てることではない。同時に、「生活適応活動」は、乳児からすれば「自分がやろうとすること」と「自分の能力水準」に段差がある。例えば、コップをとろうとしてうまくとれないように（大筋力から小筋力への分化、快・不快からしつと喜びへの分化など）、成長や発達には順序性がある。さらに、人

との関係において、乳児は大人にコップをとってほしい時、自分ができないことを大人に援助を求めたりすることもある。子どもは「生活適応活動」を自ら育んでいく（自分でやろうとする力）とも考えられ、乳児保育は、「必要な生活適応活動への様々な援助」という大人の働きかけが保育内容の軸となる。08 指針は、「心情・意欲・態度」の育ちを提議しているが、特に重要な視点として考えてみる時「生活適応活動」から保育内容の整理が必要である。「生活適応活動」は、人との関係性のなかで育つことから、大人すなわち保育者の保育実践構造への視点が重要である。

(2) 「生活適応活動」を軸とした人との関係性

乳児は人との関係性が大切であることは理解されている。しかし、実際の乳児保育は集団保育であり 1 対 1 対応ではない。乳児保育は子ども同士の関係性には焦点があたっているが、保育者の子どもへの働きかけについて具体的には整理されていない。乳児保育における人との関係性は、特定の大人との絆である。たとえ保護者でなくとも、乳児は大人に守られながら、大人の真似をしながら生活適応力を身につけていく。08 指針は、「生命の保持と情緒の安定」が養護の目標として提示されている。大人との関係性のなかで子どもは情動交流を育み、周りの環境に生活適応していくと考えられる。乳児保育は集団であることから、子どもにとっては、大人の働きかけが問題である。

例えば「これが食べたい」と思っても、大人に気づいてもらえないかもしれない。また順番といって待たされることもある。乳児期の子どもは、自ら言語や行為で表現できない存在である。保育者は、大人の働きかけによって子どもが振り回されるという事実を意識しておくことが重要である。また、例えば、運動、排泄、着脱等、探索活動や指先の操作性、巧緻性の育ちが必要であることから生活技能の獲得も大切な事項である。また、乳児保育における大人とのやり取り遊びは模倣する力や人との関係性において重要である。「遊びは環境を通して子どもの主体性に任せ」と 08 指針には書かれているが、乳児に任せていればそのうち育つとは限らない事項である。65 指針には「大人の援助・指導が子どもの成長を作り出す」となっており、統合した視点が必要と考える。

V 乳児保育の実践構造の課題解決に向けて

以上、乳児保育における実践構造について述べてきたが、実際の保育現場でヒアリングを実施し、乳児担当者の思いに触れてみた。あくまでもプレヒアリングである。

1. 調査対象

ヒアリング調査対象保育者は、近畿圏民間保育園 21 園 (各 4 名)、3 歳未満児担当の保育者 82 名である。

2. 調査時期

調査実施時期は、2017 年 7 月半ばから 8 月半ばの 1 か月の実施であった。

3. 調査目的と方法

ヒアリング調査の目的は、乳児保育の実践構造の課題解決に向けたあくまでも予備調査である。すなわち、乳児の担当保育者は、日々の日案において、何を乳児保育の軸として実践しているのかを知ることである。

近畿圏民間保育園 21 園を訪問し、3 歳未満児担当の保育者 82 名 (各園 4 名ずつ) にヒアリングを実施した。ヒアリングであることから質問は簡潔に実施した。1 つは、「3 歳未満の保育では次のどの項目を中心として日案をつくっていますか？」2 つは「3 歳未満の保育で大切にしている事はなんですか？」今回の研究は、乳児保育の実践構造を解明するための継続研究である。前著論文 (大方ら 2012) の結果である 4 つのモデルを参考として質問項目を作成した。すなわち、65 指針からは 2 つの実践構造 (後述の①単純活動モデル、②望ましい活動重視モデル)、08 指針からは 2 つの実践構造 (後述の③ねらい重視モデル、④主体重視モデル) が想定された。前述したように先行研究が少なく、ヒアリング調査の先行モデルがないことから調査内容については今後の課題である。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮に基づき、ヒアリング回答者に対しては、口頭により、インフォームド・コンセントを目的とした説明文を冒頭申し入れ、調査協力に対する同意を得ることを必須とした。調査への回答は任意であること、回答の拒否や中断は可能であり、そのことを理由として不利益が生じることがないこと、研究の目的以外に調査データを使用しないことなどを前提として、調査協力を依頼した。

5. 結果と考察

課題 1) 「3 歳未満の保育、日案ではどの項目を中心として作成しているのか」というヒアリングに対しては以下ようになった。(表 3) ヒアリングからは、対象として取り上げる事例には、今までに分類してきた 4 つの全てのモデルが存在していることがわかった。一番多いモデルは②生活・遊びであり、83.1%であった。次いで④子ども理解と保育者の配慮が 65.2%であった。①基本的な生活習慣 56.2%、③養護と教育 (5 領域) 42.7%であった。4 つのモデルの特徴は以下のとおりである。①基本的な生活習慣は「①単純活動モデル」であり、特徴は、保育者が中心となって乳児保育の実践構造を構築している。②生活・遊びは「②望ましい活動重視モデル」であり、外的操作だけではなく、乳児に育てるべきねらいを望ましい経験として示していると理解することができる。③養護と教育 (5 領域) は「③ねらい重視モデル」であり、ねらいだけではなく内的操作に着目している。④子ども理解と保育者の配慮は「④主体重視モデル」であり、子ども主体である。子ども理解と保育者の配慮という外的操作と内的操作 (子ども自身の活動目的・どのような面白さ・楽しさ・喜びを感じているか) の両方に着目している。

課題 2) 保育者は、「3 歳未満の保育では、何を大切にしているのか」という質問に対しては、「関係性」、「環境」、「生活」の順となった。「関係性」は、子ども理解と保育者の配慮という外的操作と内的操作 (子ども自身への応答・受容・愛情・愛着等) の両方に着目していることがわかる。(表 4) 「環境」は「安全・安心」であるが、「家庭的」という回答もあった。「生活」は、「生活習慣」であった。このことは、前述した金田 (1980) らが 1980 年代に教育心理学会などで展開した「乳児保育における発達研究の理論と方法をめぐって - 保育の構造と子どもの発達 -」を企画した問題意識との関連が伺える。すなわち、保育の実践構造の全体性を志向したものと考えることができる。ここでは、やや結論的に、関係・環境・指導 (基本的な生活習慣) の 3 つをキーワードとして検討しており、乳児保育の実践構造を解明する手がかりを与えている。(表 4)

表 3 3 歳未満の保育における 日案の重点項目

回答者数	①基本的な生活習慣	②生活・あそび	③養護と教育 (5 領域)	④子ども理解と保育者の配慮
89	50	74	38	58
100%	56.2%	83.1%	42.7%	65.2%

4つのモデルは、活動を系統的に発展させる積極的な保育の役割を承認するモデルと子どもの主体的な活動・子どもが環境に関わって主体的な活動が中核になるという2つのモデルがあることがわかった。前者は系統的な活動を育てるモデルであり、外的活動が中心である。保育者の論理ともいえる。後者は子ども中心のモデルであり、内的活動が中心である。むしろ子どもの論理といえる。これらの対立軸は十分な考慮や議論が必要である。保育の理論としてはどのように理解すべきかは大きな課題である。筆者らは、いずれかではなく、むしろ2つのよさを認めつつ各々が持つ問題点を克服する保育を「融合保育」とよんでいる。むしろ、ねらいと活動を統合することが必要である。「保育は子どもの力と保育者の力が調和して働く時に保育は有効になる。」という考え方を提案する。2つの力をかみ合わせるような保育を融合保育とよぶ。65指針も08年指針も「ねらいと活動という2つの力が働く必要がある」という議論と考えられる。65指針は、望ましい内容を活動として整理しているが、望ましい活動と考えているのは保育者であり、保育者が活動を選択する。08指針は発達の側面を意識した時、保育課程や年間指導計画では領域のねらいを前面に出している。しかし子どもの自発性・意図性と保育者の指導性・意図性のどちらかという議論ではない。両方が大切であり、その調和をどのように図るのかという視点から提案している。では、ねらいには「子どもの心情・意欲・態度」を書くのか、「望ましい活動」を書くのかという問題

を考えても、子どもの成長に関わっている以上どちらも大切であるといえる。むしろ、両者の調和や統合をどのように図るのかが実践構造として必要である。「子どもの最善の利益」を追求する「保育実践」のなかで、4つのモデルが示すいいところを持ち合わせた指導計画の作成が課題である。融合の保育では、「保育の理念」（保育方針を含む）を提議し、それをふまえた子ども像を提案する。子どもの願いをふまえつつ、保育側の「考え」や「願い」を明確にする。その中心は「生きる力」であり、乳児保育の実践構造では「生活適応力」を重視する。それを保育目標として、08指針のように子どもの内的操作、内面の育ちや「心情・意欲・態度」の育ちとする。

VI 結論

乳児保育の実践構造には多くのタイプがあることがわかった。むしろ、乳児保育の実践構造は、ねらいと内容の統合的理解の仕方、及び、子どもの活動の理解の仕方に課題があることを指摘した。問題は、保育の方向性を書く時に、具体的な「活動」を書きすぎると実践では保育を縛ってしまう可能性がある。また、「ねらい重視」の場合は、実際には発達の側面から「ねらい」を書くことになる。「ねらい」がそのまま保育の内容になることはないことから保育実践ではどこかで転換していることになる。しかしながら、子どもの「活動」は、周りにある物や子どもに働きかけることだけを意味しているのではない。むしろ「活動」そのものに、子どものいろいろな思いがあると考えられる。筆者は、乳児にとっての生活は、生活適応であると考え。お水を飲む時に子どもなりのやり方もあり、大人とのやり取りを模倣しながら、その行為を習得する過程のなかで子どもなりに動機づけられている。子どもの活動には、子どもの内面の活動があると考え、子どもは内的活動をしていると考えることができる。活動を出発点とする場合、活動における子どもの気持ちや子どもの行う内的操作を念頭におくことで、単に「させる活動」という視点から脱却できるのではないかと考えられる。一方、「ねらい」として何を書くかということは重要な問題である。代表的には、望ましい活動か心情・意欲・態度かということがある。これも先の問題と同じく両方とも必要であり、どちらかということではない。2008年保育所保育指針が指摘しているように、望ましい活動に追いやる保育・させる保育が乳児でも幼児でも想定できる。「心情・意欲・態度」と書くことで子どもの主体性を大事に育てようという発想は重要な問題を提起している。しかしながら、「心情・意欲・態度」からねらいを書くことには問題も多い。すなわち、

表4 3歳未満の保育で大切にしている事

大分類	件数	割合	キーワード	件数	割合
環境	25	28.1%	家庭的	5	5.6%
			安心	10	11.2%
			安全	10	11.2%
生活	11	12.4%	生活・習慣	10	11.2%
			経験	1	1.1%
関係性	37	41.6%	関わり	10	11.2%
			応答	1	1.1%
			受容	7	7.9%
			対応	4	4.5%
			愛情	4	4.5%
			愛着	6	6.7%
			信頼	5	5.6%
子どもの気持ち	8	9.0%	情緒の安定	2	2.2%
			子どもの気持ち	4	4.5%
			好奇心	1	1.1%
			自尊意識	1	1.1%
子どもの育ち	1	1.1%	個性	1	1.1%
理解	4	4.5%	子ども理解	2	2.2%
			個々の発達	2	2.2%
保護者	3	3.4%	保護者との関係	3	3.4%
回答者数	89	100.0%	回答者数	89	100.0%

第1には、「〇〇をして遊ぶ」ではなく「〇〇を楽しむ」「〇〇をしようとする」というような言葉のいいかえで終わっているケースが見られる。乳児保育は、大人が積極的かつ直接的にモデルになって示唆することが重要であるにも関わらず、乳児からの出方を「待つ」保育がいい保育と思っている場合がある。コップを持つ時に手を添えるという直接的な示唆が必要な場合もあるが、心情・意欲・態度で書くことにより保育者の積極的な関わりを制限している場合もある。基本的には、この2つを使い分けることも重要であることを提案したい。例えば、長い過程の保育を見通す保育課程の場合には「〇〇を楽しむ」「〇〇の遊びをしようとする」というような心情・意欲・態度を含めて先に述べた内的活動に主な視点をあてて提起することも考えられる。つまり、子どもに育てるべき大きな方向・内的活動を提示することを軸において具体的な活動はその軸から導き出せるようにすればどうであろうか。その場合、発達の側面を前面に出すのか、内的活動を前面に出すのかという問題はありますが、それは保育所として方針を決めて実施するようにはしてはどうか。短い過程の場合には、その日の子どもの興味の持ち方などとも関連して考えてはどうか。ブロックの遊びが積み木の遊びになったとしても、保育者が育ちの視点を持っている限り特にこだわることはないと思われる。2つの中間が、年間・期別の指導計画である。月間指導計画には、保育課程・年間から整理したその月の活動の主な心情・意欲・態度、内的活動をねらいとして書くことが重要である。ねらいの次には、内容として何を書くかということである。基本的に、保育の内容というのは子どもが成長を遂げていくためのねらいがどのような事柄・材料（保育材料・保育環境など）を通して子どもが成長していくのかを提起するものである。

乳児保育は、学習活動として組織されることが一義的にあるのではなくて、子どもの「生活適応活動」がまずあることを確認することが大切である。乳児保育は、生活適応活動が保育の全体にあり、その上で保育のねらい・内容があるとすれば保育内容はどうなるか。厳密にはねらいの立て方にもよるが、生活適応活動の全てが保育の活動であり、そのなかで、保育の目標・ねらいを実現していくことになる。生活適応活動全体が保育内容であると考えることが可能である。保育内容とは子どもの活動そのものであり、保育者が何らかの目的を持って事柄・材料を選択し、配列することが保育内容の組織編成ということになる。発達と活動の見地から目標・ねらいを特定化していくことが必要である。乳児保育は子どもや大人との関係性が重要な意味を持つ。生活適応活動を保育内容として位置づけることを確認しておきたい。このよ

うに保育内容を考えると乳児保育の実践構造は組織的・調和的に整理しておく必要がある。発達の側面から保育内容を位置づける発想と子どもの活動から位置づける発想については確認してきた。どちらがいいかという議論が起こるが、融合保育の視点からは両方必要であるとの視点から論ずる（表2）。

つまり、発達の視点からのねらいと活動の視点からのねらいをどう調和させるのかが実践構造の課題となる。

以上のことを前提として保育内容の区分を考えると、発達を土台として区分を考える時には、08指針の「養護プラス教育」という領域を採用することも可能である。その場合には、ねらいを実現する活動をどのように整理しておくのかを明示しておく必要がある。反対に、活動から考える際には、65指針が示したように、生活と遊びの領域区分を出発点としてその活動内容が発達の領域とどのように関連するかを検討しておきたい。08指針の「養護プラス教育」では、2つの事項の考え方が発生する。大事なことは、この2つの事項の視点を指導計画編成のなかに押さえる事である。年間指導計画では活動の側面からの区分を提起し押さえる事である。あるいは、期別・月別の指導計画で活動の展開を読み取れるようにすることが大切である。

Ⅶ 今後の課題

乳児保育の実践構造において、保育内容の4つのタイプの妥当性の検討は、保育者をどう位置づけるかという議論とつながっているだけに重要である。特に、乳児の保育内容を考える際に、保育者と乳児の関係は保育内容そのものである。保育内容の定義・特徴理解とも関係している。

確かに、08指針では「人間関係」という領域・発達の側面が取り上げられているが、実際の乳児保育ではうまく活用できるのだろうか。領域の「ねらい」は幼児を対象とした幼稚園教育要領における「ねらい」の視点である。したがって、乳児保育における人との関係性を説明することは難しいということが基本問題である。例えば、乳児保育における実践構造には、「大人に世話してもらえ関係」、「大人との共同での関係」、「自立した関係」、という3つの視点がある。その関わり方・大人との対話ややり取りといった関係そのものが保育内容の中心であると考えられることもできる。また、乳児にとって生活適応活動の大部分が大人との情動的交流を土台とした生活適応活動であるならば、むしろ保育内容「人間関係」という領域そのものが、乳児保育の実践構造として混乱する可能性を含んでいる。08指針では、人間関係のねらいと

して、「自分の力で行動することの充実感を味わう」、「周りとの愛情や信頼感を持つ」、「望ましい習慣や態度を身につける」、の3つのねらいが掲げられている。しかし、乳児期の重要な保育課題である「歩く」ことを考えてみる時、土台となっているのは「あのおもちゃに触りたい」という乳児の適応活動であり、移動の動機・目的とそれを共にしてくれる大人との関係が土台であり、子どもの全ての領域の土台となると考えることができる。いずれにしても、乳児保育における実践構造において、保育者の役割は重要であり、その位置づけをする保育内容の考え方を提起することが必要である。保育者の関わり方が乳児の成長の土台であるが、その故に、保育者任せにしてしまう傾向にある。保育実践構造としては、保育現場に任せ保育者の主体的活動によればいいという意見もあるが、子どもの未来を考える時には問題である。人との関係性は生きる土台である。そのためには、乳児保育の実践構造には、08指針が提起する保育者の2つの関わり方である養護と教育の事項を整理し、適応活動の軸としてどのように指導計画に位置づけるかが課題である。以上のことから、乳児保育の実践構造を考えると、上記の4つのモデルのいずれもが適用可能ということになる。しかし、実践的には、どうもこのいずれもがモデルとして乳児の保育で実際とは合っていないように思える。乳児保育の保育構造はどうあるべきかはほとんど整理されていないことになる。確かに、ある程度の枠組みはあるので実践プランを含む実践構造を評価することは可能であろう。例えば、実践プランがどこかに偏っていたり、段階があまりにも幼児的すぎたりというようなかたちでの自己評価・保育所評価、改善という実践プランの背景を議論することは可能であると考えられる。取り出した活動モデルを使って、実践計画をイメージして乳児保育の方向を検討する。

以上の分析から、保育実践構造としてはどのような課題が考えられるか。

- 1) 指導・援助に必要な概念の整理をしておく必要がある。指針では、指導計画といいつつも何のためにどのような計画が必要か明確にする必要がある。しか

し、基礎概念が揺れ動いたりしている。同様のものとしては、保育課程、ねらい・内容、などがある。

- 2) その整理をふまえて、保育課程、指導計画と連結するにはどうすればよいのか、特に、実践計画が指導計画となる必要がある。そのための理論構築をどう考えるのか。理論構築という点では、児童中心主義と系統主義の保育の考え方の違いともいえるが、「育てると育ちの融合」という視点を持つことともいえる。具体的な指導計画論を通して明らかにしたい。
- 3) 合わせて、どのようにすればよいか、ねらいと内容が重なる必要があるのか、もし分けるとすれば、何を基準とするのか、乳児の実践構造を現行指針のように領域の発想で整理する必要があるのかどうか、また、領域というのは、「活動（生活と遊び）」の領域なのか「ねらい」の領域なのかを検討する。
- 4) 最終的に、乳児保育の実践構造とは何かという問いに答えを出す必要がある。
- 5) 以上のことから、乳児保育の実践構造の解明に向けての研究課題が明らかになり、今後の継続的な検討のための枠組みの一端が提起できたのではないかと考えられる。特に、保育現場、もしくは、それに近い研究者が現場の視点で論理化していくことが重要であると考えている。乳児保育の実践構造は、子どもの個人差や2008年保育所保育指針の発達区分以上に、保育者は乳児の何を育てるのかという働きかけを整理するという課題がある。しかし、保育実践を豊かにするということが、保育実践がどのような構造を持っているのかを知る必要があるにも関わらず、まだ明らかではない。乳児保育における実践構造とは、子どもに働きかける保育者の保育実践としてどのような生活内容を考えるのかということである。乳児保育はクラス運営でもある。どのような保育方法で保育に臨めばよいのか、どのような視点から保育の振り返りを行えばよいのか、明日の保育にはどのようにつなげていくのかは、むしろ子どもと保育者の内的側面であり、保育実践への提議は重要である。

注1) 先行研究論文概要一覧表(年代降順)「キーワード:指導計画・保育」

	論文タイトル	著者	発行年	論文キーワード	掲載雑誌
1	保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討 - 乳児保育研究その2 -	大方美香	2016	乳児保育、指導計画、保育所保育指針	大阪総合保育大学紀要(10), A15-A30.
2	保育者の指導計画実践に依拠した検討: 幼児教育における専門性の考察	保田 恵莉	2015	指導計画実践、幼児教育	総合人間科学 = General human science 3, 161-176.
3	0歳児クラスの指導計画について: クラス全体の月案の必要性	齋藤 信	2013	0歳児クラス、指導計画	越谷保育専門学校研究紀要(2), 77-84.
4	保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討 - 乳児保育研究その1 -	大方 美香・小寺 玲音・玉置 哲淳	2013	乳児保育・指導計画の編成・保育所保育指針・保育学	大阪総合保育大学紀要(7), A67-A94.
5	保育所における指導計画作成に関する実態調査: 保育士へのアンケートをもとに	三好 年江	2012	指導計画・保育の基本・研修・子どもの実態	新見公立大学紀要 33, 169-175.
6	保育雑誌に掲載される年間指導計画モデルの分析と評価	田中 敏明・金丸 智美・永淵 美香子	2012	年間指導計画、保育雑誌	教育実践研究(20), 155-161.
7	4歳児のクラス経営の視点と展開 - 保育におけるクラス経営の実証的研究(2) -	玉置 哲淳	2012	クラス経営・4才児・指導計画	大阪総合保育大学紀要(6), A77-A112.
8	幼児期の教育課程と指導計画に関する研究の動向: 日本保育学会における口頭発表(1985~2009)を中心に	林 富公子	2011	教育課程指導計画	園田学園女子大学論文集 45, 259-268.
9	保育所保育課程の研究	丹羽 孝	2011	保育所・保育課程	名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究(14), 1-23.
10	保育記録にみられる保育評価の実態	柘島 香代・原田 育美・椎木 奈津美	2011	保育評価	文京学院大学人間学部研究紀要 13, 311-319.
11	保育におけるカリキュラム	深見 俊崇	2011	保育・カリキュラム	保育研究 39, 18-23.
12	指導計画づくりに活かすための保育記録のあり方(1)- 先行文献の整理を中心に -	瀧川 光治	2011	指導計画・保育記録	教育総合研究叢書 4, 53-70.
13	乳児保育における保育の計画	大方 美香	2010	保育所保育指針・乳児保育・指導計画	大阪総合保育大学紀要(4), 129-144.
14	保育の質を高めるための指導計画の評価 - 担任保育者による評価内容の分類	鍛冶 礼子・中島 千恵子	2009	指導計画	幼年教育研究年報 31, 71-81.
15	保育における個別指導計画についての一考察	室田 一樹	2008	個別指導計画	皇学館大学社会福祉学部紀要(11), 151-163.
16	人間味の深化を願う領域「人間関係」の指導	宮田 暉朗	2008	領域「人間関係」	上田女子短期大学幼児教育学科保育者養成年報 28-35.

注2) 「行為」とは: 人格的有意的な働き。目的と動機が明らかで、手段その他についての思慮、選択を経て決意された自覚的な活動。ただし、法行為における不作為、実存的行為のように、常に身体運動を伴うとは限らない。したがって無自覚な機械的本能的動作とは異なり、刺激に対する全体的反応としての行動とも区別され、人格に不可欠の理性、意志、自由、責任などの諸概念と密接な関わりを持つ。技術的制作動作も有意的であるが結果のみが問われる点で、動作そのものが問題となる行為とは区別される。アリストテレスは theōria (観想)、poiēsis (制作、技術的实践) に対し、praxis (実践、倫理的实践) の概念を立てたが、これが西洋の行為概念の伝統となっている。人格は行為を通じてのみ実現されるから、行為は人間存在が自己を外化し、外化を通じて自己を内化する自己実現の活動を意味する。行為はまた他の人格ないし超越的人格性(神、超越者)への働きかけであるから、人倫的行為と実存的行為とが区別される。前者は言語行為、慣習的行為、法行為、後者は自殺、宗教的行為、内面的諸行為など。実存的行為の主体は実存としての人間存在で、常に超越者と関わり、具体的状況のなかで行う。サルトルは行為を歴史的状況において自由を実現する決断的投企と規定する。(下線は大方による。) 出典 | ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 / ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典について…西欧語では、practice (英語)、Praxis (ドイツ語)、pratique (フランス語) など。その場合、自然に対する働きかけを、特に〈労働〉とよび、社会に対する働きかけを、倫理的・政治的活動として、特に〈行為〉(英語 conduct、ドイツ語 Handlung、フランス語 conduite) とよぶことがある。これに対して、〈行動〉(英語 behavior、ドイツ語 Verhalten、フランス語 comportement) は、主として外部から観察しうる人間や動物の、何らかの物あるいはできごとに対する反応活動

をいうことが多い。…出典 | 株式会社日立ソリューションズ・クリエイト / 世界大百科事典 第2版について

<参考文献>

相場幸子 1988 「ピアジェの感覚運動的知能 - 早期発達援助の観点から -」 厚生労働省編北星論集(文) 25号
 石橋由美、三好年江 2004 「授業評価と保育所保育実習との関係についての予備的研究: 授業『乳児保育II』の改善のために」(創刊二十五周年記念号) 新見公立短期大学紀要 25号
 稲貝祥子 2009 「『乳児保育』における保育学科学学生作成の3歳未満児の発達を促す手作りおもちゃ作品展示報告」下関短期大学紀要 28号
 大場幸夫 2007 「こどもの傍らに在ることの意味 - 保育臨床論考 -」 萌文書林
 大場幸夫、網野武博、増田まゆみ 2008 「保育を創る8つのキーワード」 株式会社フレーベル館
 大宮勇雄 2006 「保育の質を高める」 ひとなる書房
 大方美香、小寺玲音、玉置哲淳 2012 「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討 - 乳児保育研究 その1 -」大阪総合保育大学研究紀要第7号 (67-94)
 荻尾ミドリ 2010 「保育者養成校における「乳児保育」の意義と理解 - わかる授業をめざして」 久留米信愛女学院短期大学研究紀要 33号
 柏女霊峰 2008 「子どもの権利を保障するための視点 - 子ども家庭福祉の再構築期を迎えて (特集、子どもの権利を守る)」 月間福祉 91(1)、12-17
 梶美保、神崎みち代、松生泰子、恵村洋子、豊田和子 2003 「乳児保育の質的向上をめざして (2): 乳児期の保育内容 “食

- の援助について考える” 日本保育学会大会発表論文集 (56)
- 梶美保、豊田和子 2007 「食援助のプログラム開発と実践改善 - 乳児保育の質的向上をめざして」 高田短期大学紀要 (25)
- 加藤繁美 2009 「対話と保育実践のフーガ」 ひとなる書房
- 金田利子、諏訪きぬ、土方弘子 2000 「『保育の質』の探究 - 『保育者-子どもの関係』を基軸として -」 ミネルヴァ書房
- 上村眞生、七木田敦 2008 「保育士のサポート源構造に関する実証的研究」 小児保健研究 vol.67.No.6
- 川島明希子、高坂悦子 2008 「お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (17) : 乳児保育実践の省察にむけて戸越ひまわり保育園訪問から」 幼児の教育 107(5)
- 神田英雄 1998 「『受けとめる』『受容』についての実践提案の位置づけ」(第15回全国保育問題研究協議会・夏季セミナー報告)「乳児保育」季刊保育問題研究 (174)
- 小林友子 1997 「矢倉乳児保育園での1歳児の絵の実践」 日本保育学会大会研究論文集 (50)
- 韓 仁愛 2003 「088 戦前期における乳児保育の内容と方法」 日本保育学会天会発表文集 (56)
- 鯨岡峻、鯨岡和子 2002 「保育を支える発達心理学」 ミネルヴァ書房
- ゲゼル、A 1966 「乳幼児の心理学」 山下俊郎訳 家政教育社
- 厚生労働省 2008 「保育所保育指針」 フレーベル館
- 厚生労働省 2008 「保育所保育指針解説書」 フレーベル館
- 小西行朗 2009 「子育ての神話 発達神経医の立場から」 心理学ワールド 46号
- 小林芳郎監修 2003 「子どもと保育の心理学 - 発達臨床と保育実践 -」 保育出版社
- 小林芳郎編 2007 「子どもを育む心理学」 保育出版社
- 金田利子 1980 「乳児保育における発達研究の理論と方法をめぐって - 保育の構造と子どもの発達 -」 教育心理学会における自主シンポジウム 教育心理学年報 23, 93-94, 1984-03-30
- 塩川寿平、小林友子、野々目桂三、喜田周一、山田星史、富田喜代子、山本卓、塩川成子 1997 「心を表現する幼児画の理論と実践について」 日本保育学会大会研究論文集 (50)
- 新保育士養成講座編纂委員会編 2011 「保育の心理学」 全国社会福祉協議会
- 黒岩英子、青山優子 2004 「乳児保育所1-2歳児運動遊びの実践と保育者の援助」 西南女学院短期大学研究紀要 50号
- 児嶋雅典、菅田栄子 2001 「保育者養成における乳児保育の構想：育児記録を用いた授業実践の試み (1)」 松山東雲短期大学研究論集 32号
- 菅田栄子、児嶋雅典 2002 「保育者養成における乳児保育の構想：育児記録を用いた授業実践の試み」 松山東雲短期大学研究論集 33号
- 清水益実 1984 「応用発達心理学の立場から：保育実践を通して「乳児保育」における発達研究を考える (大阪堺市・いづみ保育園の実践から)」(「乳児保育に関する発達研究の理論と方法をめぐって [IV] : 保育の構造と子どもの発達」) 教育心理学年報 23号
- 社会福祉法人日本保育協会 2009 「わかる！ できる！ 新保育所保育指針 実践ガイド」 中央法規出版株式会社
- 城ヶ峰直子 2004 「学生と沐浴人形との相互作用による - 考察 - 学生の実態分析による「乳児保育」実践指導の在り方」 尚
- 綱短期大学研究紀要 幼児 36号
- 清水茂、久米マスミ、小林友子 「幼児教育実践理論の研究」 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要 14号
- シルヴィーレイナ、星三和子 「保育の中に隠された価値観の日仏比較：乳児保育をめぐる」 日本保育学会大会発表論文集 (55)
- 千田みつゑ、上田太枝子、工藤由紀 1992 「すみれ乳保育園一時的保育事業の実践 (施設を地域の「とりで」に - 大阪福祉事業財団の歴史と実践 - 3 - 保育施設実践レポート)」 賃金と社会保障 (1091)
- 西村真美 2010 「『乳児保育』授業内容についてのテキスト項目の検討」 大阪成蹊短期大学研究紀要 (7)
- 野中千都 2008 「『乳児保育II』の教授内容に関する一考察：学生によるアンケート調査より」 (短期大学部保育課) 西南女学院大学紀要 12号
- 田代泰子 1985 『実践記録 (1歳児保育) の分析から：「乳児保育」に関する発達研究の理論と方法をめぐって (V) : 保育園における保育者と子どもの関係：自主シンポジウム』 教育心理学年報 24
- 玉置哲淳 2002 「新版幼児教育課程論入門」 建白社
- 玉置哲淳 2008 「指導計画の考え方とその編成方法」 北大路書房
- 玉置哲淳 2011 「幼稚園におけるクラス経営論の課題と方向についての覚書 - クラス経営の実証的研究所説 -」
- 玉置哲淳 2010 「乳児の人権保育実践展開の視点と目標 (詩論)」 エデュケア 30
- 土方弘子 2000 「保育所保育指針と乳児保育実践の課題 (特集 保育指針改定を考える)」 保育の研究 (17)
- 土谷長子、高内正子 2000 「演習授業におけるビデオの活用：乳児保特集IIでの実践」 日本保育学会大会研究論文集 (54)
- 中井宏行、衣川文乃 「SIDSを考え、0歳児クラスで仰向け寝を実践して (特集 第38回全国保研研 - 静岡集会提案) (分科会提案 - 1 - 乳児保育)」 季刊保育問題研究 (176)
- 中川愛 2010 「保育士養成課程における学生の不安軽減を目指した授業実践の検討 - 乳児保育に対する学生意識調査」 湊川短期大学紀要 46号
- 西村真美 2011 「乳児保育教授内容についてのテキスト項目の検討」 大阪成蹊短期大学研究紀要 7号
- 橋川喜美代、岩崎美智子、塩路晶子、小林友子 2005 「子どもの“こだわり”に寄り添う保育に貫かれる子ども理解と受容」 鳴門教育大学学校教育実践センター紀要 19号
- 初塚真喜子 2010 「アタッチメント (愛着) 理論から考える保育所保育のあり方」 相愛大学人間発達学研究
- 波多野完治編 1984 「ピアジェの発達心理学」 国土社
- バターワース、J / ハリス、M 1997 「発達心理学の基本を学ぶ」 村井潤一監訳 ミネルヴァ書房
- ピアジェ、J 1988 「遊びの心理学」 大伴茂訳 黎明書房
- 福沢周亮監修 2012 「保育の心理学 - 子どもの心身の発達と保育実践 -」 教育出版
- 福岡貞子、磯沢淳子 2007 「乳児の絵本の読み聞かせに関する一考察 (その2) 保育士養成校における乳児保育の授業内容を中心に」 大阪青山短期大学研究紀要 (32)
- 古橋紗人子、安井恵子 2012 「乳児保育の授業研究 (1) 予習重

- 視のグループ討議と講義内容」滋賀短期大学研究紀要(37)
- 船越利代子 2010 「“乳児保育”授業における課題：保育所実習アンケート分析から」紀要(38)
- 松生泰子、佐田恵子、恵村洋子、梶美保、豊田和子 2007 「食の意識調査と“食援助プログラム”に基づく実践改善：乳児保育の質的向上をめざして(第1部自由論文)」保育学研究 45(2)
- 松生泰子、神崎みち代、恵村洋子、梶美保、豊田和子 2004 「乳児保育の質的向上をめざして(4)：食援助の実践改善」日本保育学会大会発表論文集(57)
- 松村和子、近藤幹生、花鳥香代 2012 「教育課程・保育課程を学ぶ」ななみ書房
- 松本寿通 1997 「乳児保育(平成7年度幼児保健講習会)」日本医師会雑誌 116(5)
- 松本美紀 2008 「自分の思いをありのままに!!1・2歳児の実践(特集第47回全国保問研・岐阜集案提案)」季刊保育問題研究(230)
- 三好年江、石橋由美 2005 「授業「乳児保育Ⅱ」の模擬保育から学生が学んだこと」新見公立短期大学紀要 26
- 三好年江、石橋由美 2006 「初任保育者の担当クラスと子どもの遊びにかかわるときの問題意識からみた保育士養成校の課題」新見公立短期大学紀要 27
- 無藤隆、高橋恵子、田島信元編 1990 「発達心理学入門Ⅰ-乳児・幼児・児童-」東京大学出版会
- 森上史朗 1988 「よりよい実践研究のために」ミネルヴァ書房別冊発達.7.
- 森田健宏、井上千晶 2009 「乳児保育担当保育士の資質と養成機関の課題-乳児保育担当への不安と「学・職」連携教育による充実」夙川学院短期大学教育実践研究紀要(2)
- 吉葉研司、汐見稔幸、土屋みち子、松永静子 2001 「176 乳児保育における「保育者-子ども相互関係形成」の重要性について：保育実践が「親-子ども」関係の改善に与える影響」日本保育学会大会研究論文集(54)
- 文部科学省 2008 「幼稚園教育要領」フレーベル館
- 文部科学省 2008 「幼稚園教育要領解説」フレーベル館
- 山下俊郎編 1965 「保育所保育指針解説」ひかりのくに株式会社
- 横松友義、浅野泰昌、近行あさみ、姚金柱 2007 「これからの保育構造論構築に関する一考察」岡山大学教育学部研究集録第136号
- Bredenkamp, S. and Copple, C. (ed.) 1997 Developmentally Appropriate Practice in Early Childhood Programs Revised Edition, NAEYC
- Copple, C and Bredenkamp, S. (ed.) 2009 Developmentally Appropriate Practice in Early Childhood Program Serving Children from Birth through Age 8 3rd edition NAEYC
- <参考「乳児保育」教科書>**
- 大方美香 2014 総合保育双書2 乳児保育計画論-2つのタイプの事例を比較して- ふくろう出版
- 志村聡子 2009 はじめて学ぶ 乳児保育 同文書院
- 阿部和子 2007 演習 乳児保育の基本 萌文書林
- 楠原洋一 2006 今求められる質の高い乳児保育の実践と子育て支援 ミネルヴァ書房
- 松本園子 2006 新・乳児の生活と保育 ななみ書房
- 高内正子 2005 乳児保育への招待-胎児期から2歳まで-北大路書房
- 吉本和子 2002 乳児保育-一人ひとりが大切に育てられるために- エイデイル研究所
- 待井和江 2000 乳児保育-その理論と実践- ウェルビーイング株式会社
- 迫田圭子 1999 養成校と保育室をつなぐ理論と実践-見る・考える・創り出す乳児保育 萌文書林
- 川原佐公 1997 乳児保育総論 保育出版社
- 待井和江 1995 乳児保育 第3版(現代の保育学⑧) ミネルヴァ書房
- 阿部和子 1995 乳児保育-子どもの豊かな育ちを求めて-萌文書林
- 土山忠子 1993 教育・保育双書第18巻 乳児保育 北大路書房
- 菅俊夫 1986 乳児保育Ⅰ・Ⅱ 学術図書出版社
- 村山貞雄 1986 乳児保育 学術図書出版社
- 吉岡毅 1982 新版 乳児保育 光生館
- 港野悟郎 2004 0歳児・1歳児・2歳児のための乳児保育 光生館
- 玉置哲淳 2010 乳児の人権保育シリーズ1 2歳児の人権保育 解放出版社
- 井坂由美子 1992 現代の乳児保育 建帛社
- 待井和江 1984 乳児保育(現代の保育学⑧) ミネルヴァ書房
- 待井和江 1979 乳児保育 東京書籍株式会社
- 岩堂美智子 2001 [改訂版] 新・乳児の発達と保育 ミネルヴァ書房
- 増田まゆみ 2009 新 保育ライブラリ 保育の内容・方法を知る 乳児保育 北大路書房
- 吉岡毅 1974 乳児保育 光生館
- 待井和江 2005 乳児保育 第5版(現代の保育学⑧) ミネルヴァ書房
- 九州保育団体合同研究会常任委員会 2009 「保育っておもしろい!」ブックレット 乳児保育 かもがわ出版
- 二木武 1976 乳児保育 同文書院
- 千羽喜代子 1990 保育講座11巻 乳児保育 ミネルヴァ書房
- エドワード C.メルフィッシュ 1992 乳児保育の国際比較 保育の新しい潮流 チャイルド出版
- 伊藤忠好 1973 乳児保育の原理 福村出版
- 松本武子 1975 乳児保育要説 家政教育社
- 川原佐公 2010 赤ちゃんから学ぶ「乳児保育」の実践力-保育所・家庭で役立つ- 教育情報出版
- 乳児保育研究会 2010 改訂新版 資料でわかる乳児の保育新時代 ひとなる書房
- 土山忠子 1980 乳児の保育 建帛社
- 川原佐公 1992 乳児保育 楽しい乳児保育をめざして 三晃書房
- テルマ ハームス 2004 保育環境評価スケール①<幼児版> 法律文化社
- 川原佐公 2014 保カリBOOKS 0・1・2歳児の指導計画書き方サポート ひかりのくに

保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討

- 今井和子 2010 独自性を活かした保育課程に基づく指導計画
-その実践・評価- ミネルヴァ書房
- 柴崎正行 2010 CD-ROM版 年齢別クラス運営① 0歳児の
クラス運営 ひかりのくに
- 今井和子 2014 教育技術『新 幼児と保育』MOOK 0・1・
2歳児の担任になったら読む本 育ちの理解と指導計画 小
学館
- 川原佐公 2000 新・年齢別クラス運営① 0～1歳児のクラ
ス運営 ひかりのくに
- 佐藤暁子 2013 保育とカリキュラム BOOKS22 0～5歳児
指導計画の書き方がよくわかる本 ひかりのくに
- 増田まゆみ 2013 Gakken保育Books 発達が見える！0,1,
2歳児の指導計画と保育資料 学研教育出版
- 松本峰雄 2011 U-CANのよくわかる指導計画の書き方(0,
1,2歳) ユーキャン学び出版
- 柴崎正行 2001 個と集団が育ち合う園生活第1巻 0・1歳
児クラス運営のすべて フレーベル館
- 北郁子 1993 0歳児クラスの保育実践 中央法規出版
- 柴崎正行 2001 新・保育講座⑤ 教育課程・保育計画総論
ミネルヴァ書房
- 米山千恵 1997 シリーズ・ゆとりと充実のある保育園づくり
<1> 0歳児クラスの楽しい生活と遊び 明治図書
- 「新保育所保育指針の実践的解説」編集委員会 1995 新保育所
保育指針の実践的解説 全国社会福祉協議会
- 秋葉英則 2011 子どもと保育 0歳児改訂版 かもがわ出版
- 宮下俊彦 1973 「0歳児保育」年齢別保育実践シリーズ① 全
国社会福祉協議会
- 今井和子 2002 改訂新版 保育の計画・作成と展開 フレー
ベル館
- 岸井勇雄 2003 保育・教育ネオシリーズ [3] 保育の計画と
方法 同文書院
- 飯田和也 1999 指導計画立案ノート 0歳児の指導計画～考
え方と具体例～ ひかりのくに
- テルマ ハームス 2004 保育環境評価スケール②<乳児版>
法律文化社
- 横山洋子 2013 記入に役立つ！1歳児の指導計画 ナツメ社
- 横山洋子 2013 記入に役立つ！0児の指導計画 ナツメ社
- 高浜介二 2005 0歳児の保育 年齢別保育講座 ルック
- 高浜介二 2005 1歳児の保育 年齢別保育講座 ルック
- 秋葉英則 2001 シリーズ 子どもと保育 0歳児 かもがわ
出版
- 秋葉英則 2001 シリーズ 子どもと保育 1歳児 かもがわ
出版
- 柴崎正行 2010 CD-ROM版 年齢別クラス運営① 1歳児の
クラス運営 ひかりのくに
- 飯田和也 1999 指導計画立案ノート 1歳児の指導計画～考
え方と具体例～ ひかりのくに
- 荒井列 2000 新・年齢別クラス運営① 1～2歳児のクラス
運営 ひかりのくに
- 朽尾勲 1981 新訂 0・1・2歳児の指導計画 教育情報出版
- 渡邊保博 2004 実践に学ぶ 保育計画のつくり方・いかし方
ひとなる書房
- 秋葉英則 2011 子どもと保育 0歳児改訂版 かもがわ出版
- 米山千恵 1998 シリーズ・ゆとりと充実のある保育園づくり
<2> 1歳児クラスの楽しい生活と遊び 明治図書
- 入江礼子 2005 シードブック 保育内容総論 建帛社
- 玉井美和子 1999 保育の実践アイデア事例集-1 日・週・
月別保育指導計画の作り方-新教育要領・保育指針に基づく活
動- 学事出版
- 坂田堯 1984 乳幼児保育指針 日本小児医事出版
- 飯田和也 2015 朱書きでわかる！0歳児の指導計画ハンド
ブック ひかりのくに
- 飯田和也 2015 朱書きでわかる！1歳児の指導計画ハンド
ブック ひかりのくに
- 宮下俊彦 1974 「2歳児保育」年齢別保育実践シリーズ③
全国社会福祉協議会
- 松本峰雄 2011 U-CANのよくわかる指導計画の書き方(0,
1,2歳) ユーキャン学び出版
- 「新保育所保育指針の実践的解説」編集委員会 1995 新保育所
保育指針の実践的解説 全国社会福祉協議会
- 二木武 1976 乳児保育 同文書院
- 土山忠子 1980 乳児の保育 建帛社
- 今井和子 2002 改訂新版 保育の計画・作成と展開 フレー
ベル館
- 川原佐公 2014 保カリBOOKS 0・1・2歳児の指導計画書
き方サポート ひかりのくに
- 今井和子 2014 教育技術『新 幼児と保育』MOOK 0・1・
2歳児の担任になったら読む本育ちの理解と指導計画小学館
- 増田まゆみ 2013 akken 保育Books 発達が見える！0,1,
2歳児の指導計画と保育資料 学研教育出版
- 川原佐公 1992 乳児保育 楽しい乳児保育をめざして 三晃
書房
- 今井和子 2010 独自性を活かした保育課程に基づく指導計画
-その実践・評価- ミネルヴァ書房
- 総合保育研究所(代表大方美香) 2014 総合保育双書2 乳児
保育計画論-2つのタイプの事例を比較して- ふくろう出
版
- 朽尾勲 1981 新訂 0・1・2歳児の指導計画 教育情報出版
- 渡邊保博 2004 実践に学ぶ 保育計画のつくり方・いかし方
ひとなる書房
- 松本園子 2006 新・乳児の生活と保育 ななみ書房
- 高内正子 2005 乳児保育への招待-胎児期から2歳まで-
北大路書房
- 井坂由美子 1992 現代の乳児保育 建帛社
- 待井和江 1979 乳児保育 東京書籍株式会社
- 横山洋子 2013 記入に役立つ！0児の指導計画 ナツメ社
- 待井和江 1984 乳児保育(現代の保育学⑧) ミネルヴァ書房
- 増田まゆみ 2009 新 保育ライブラリ 保育の内容・方法を
知る 乳児保育 北大路書房
- 阿部和子 1995 乳児保育-子どもの豊かな育ちを求めて-
萌文書林
- 榊原洋一 2006 今求められる質の高い乳児保育の実践と子育
て支援 ミネルヴァ書房
- 玉井美和子 1999 保育の実践アイデア事例集-1 日・週・
月別保育指導計画の作り方-新教育要領・保育指針に基づく活
動- 学事出版

- 佐藤暁子 2013 保育とカリキュラム BOOKS22 0～5歳児
指導計画の書き方がよくわかる本 ひかりのくに
- 横山洋子 2013 記入に役立つ！1歳児の指導計画 ナツメ社
- 川原佐公 1997 乳児保育総論 保育出版社
- 土山忠子 1993 教育・保育双書第18巻 乳児保育 北大路書
房
- 菅俊夫 1986 乳児保育Ⅰ・Ⅱ 学術図書出版社
- 川原佐公 2000 新・年齢別クラス運営① 0～1歳児のクラ
ス運営 ひかりのくに
- 宮下俊彦 1973 「0歳児保育」年齢別保育実践シリーズ① 全
国社会福祉協議会
- 飯田和也 2015 朱書きでわかる！0歳児の指導計画ハンド
ブック ひかりのくに
- 待井和江 1995 乳児保育 第3版（現代の保育学⑧） ミネル
ヴァ書房
- 待井和江 2005 乳児保育 第5版（現代の保育学⑧） ミネル
ヴァ書房
- 松本武子 1975 乳児保育要説 家政教育社
- 秋葉英則 2011 子どもと保育 0歳児改訂版 かもがわ出版
- 飯田和也 1999 指導計画立案ノート 0歳児の指導計画～考
え方と具体例～ ひかりのくに
- 千羽喜代子 1990 保育講座11巻 乳児保育 ミネルヴァ書房
- 柴崎正行 2010 CD-ROM版 年齢別クラス運営① 0歳児の
クラス運営 ひかりのくに
- 伊藤忠好 1973 乳児保育の原理 福村出版
- 村山貞雄 1986 乳児保育 学術図書出版社
- 米山千恵 1997 シリーズ・ゆとりと充実のある保育園づくり
<1> 0歳児クラスの楽しい生活と遊び 明治図書
- 柴崎正行 2001 個と集団が育ち合う園生活第1巻 0・1歳
児クラス運営のすべて フレーベル館
- 乳児保育研究会 2010 改訂新版 資料でわかる乳児の保育新
時代 ひとなる書房
- 柴崎正行 2001 新・保育講座⑤ 教育課程・保育計画総論
ミネルヴァ書房
- 阿部和子 2007 演習 乳児保育の基本 萌文書林
- 柴崎正行 2010 CD-ROM版 年齢別クラス運営① 1歳児の
クラス運営 ひかりのくに
- 荒井列 2000 新・年齢別クラス運営① 1～2歳児のクラス
運営 ひかりのくに
- 米山千恵 1998 シリーズ・ゆとりと充実のある保育園づくり
<2> 1歳児クラスの楽しい生活と遊び 明治図書
- 飯田和也 2015 朱書きでわかる！1歳児の指導計画ハンド
ブック ひかりのくに
- 飯田和也 1999 指導計画立案ノート 1歳児の指導計画～考
え方と具体例～ ひかりのくに
- 岸井勇雄 2003 保育・教育ネオシリーズ [3] 保育の計画と
方法 同文書院
- 川原佐公 2010 赤ちゃんから学ぶ「乳児保育」の実践力
ー保育所・家庭で役立つー 教育情報出版
- 吉岡毅 1982 新版 乳児保育 光生館
- 吉岡毅 1974 乳児保育 光生館
- 宮下俊彦 1974 「2歳児保育」年齢別保育実践シリーズ③
全国社会福祉協議会
- 秋葉英則 2011 子どもと保育 0歳児改訂版 かもがわ出版
- 志村聡子 2009 はじめて学ぶ 乳児保育 同文書院
- 待井和江 2000 乳児保育ーその理論と実践ー ウェルビーイ
ング株式会社
- 北郁子 1993 0歳児クラスの保育実践 中央法規出版
- 吉本和子 2002 乳児保育ー一人ひとりが大切に育てられるた
めにー エイデル研究所
- 迫田圭子 1999 養成校と保育室をつなぐ理論と実践ー見る・
考える・創り出す乳児保育 萌文書林
- 港野悟郎 2004 0歳児・1歳児・2歳児のための乳児保育
光生館
- 玉置哲淳 2010 乳児の人権保育シリーズ1 2歳児の人権保
育 解放出版社
- 岩堂美智子 2001 [改訂版] 新・乳児の発達と保育 ミネル
ヴァ書房
- 九州保育団体合同研究集会常任委員会 2009 「保育っておも
しろい！」ブックレット 乳児保育 かもがわ出版
- エドワード C.メルフィッシュ 1992 乳児保育の国際比較
保育の新しい潮流 チャイルド出版
- テルマ ハームス 2004 保育環境評価スケール①<幼児版>
法律文化社
- テルマ ハームス 2004 保育環境評価スケール②<乳児版>
法律文化社
- 高浜介二 2005 0歳児の保育 年齢別保育講座 ルック
- 高浜介二 2005 1歳児の保育 年齢別保育講座 ルック
- 秋葉英則 2001 シリーズ 子どもと保育 0歳児 かもがわ
出版
- 秋葉英則 2001 シリーズ 子どもと保育 1歳児 かもがわ
出版
- 入江礼子 2005 シードブック 保育内容総論 建帛社
- 坂田堯 1984 乳幼児保育指針 日本小児医事出版

On the Practice Structure of Child Care and Education for Infants and Toddlers

: Focusing on 2008 Guideline for of the Child Care in the Day-care
Center

Mika Oogata

Osaka University of Comprehensive Children Education

The importance of the child care of the infants and toddlers is already pointed out. However, the general structure of the child care practice is hardly examined. Then, guideline of Day-care center for child care and education as the foundation of the child care and education in Japan examined whether to think of the practice of what infants and toddlers care in this thesis. Therefore, the guidelines of Day-care center for child care and education in 2008 and 1965 were compared and it examined it. As a result, the difference of two guidelines had understood the emphasis of emphasis of the educational planning is caused by “Subjective activity” or “Preferable experience”, and “Target and aim” or “Content and activity”. Those who put it about this emphasis are making the difference of the practice structures. Finally, we need to research on the educational planning for infants and toddlers and also educational planning of the foreign country.

Key words : child care and education for infants and toddlers, organizing of educational planning, guideline of Day-care center for child care and education, pedagogy for infants and toddlers